

石叫ぶべし

石叫ぶべし

金子純雄

三

次

十 字 架 の こ と は	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
真 実 を あ ら わ す																				
ア ン テ オ ケ の 教 会																				
イ エ ス の 宮 漂 め																				
不 信 を ぬ ぐ う も の																				
思 い わ ず ら う な																				
一 致 を 守 り 続 け な き																				
ア モ ス の 召 命																				
仕 え る べ き も の																				
羊 飼 た ち の 讃 美																				
し つ よ う な 祈 り																				
ヨ ナ の し る し																				
「富 める 青 年」 の 物 語																				
あなた の パン を 水 に あ げ よ																				
民 主 々 義 と い う こ と だ り て																				
謙 遜 と 傲 慢																				
毎 日 の 聖 句	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	
48	43	39	37	34	33	32	29	26	23	20	17	15	13	10	7	5	1	1	1	

十 字 架 の こ と ば

一小倉教会の思出にかえて

コリント 1・18と2・5

パウロはコリント伝道を開始した頃のことを思い起して「わたしがあなたがたの所に行つた時には弱くかつ恐れ、ひどく不安であつた」と語っています。

コリントは古代から「全ギリシャの光」として繁栄を誇つていた都會でした。ヨーロッパとアジアを結ぶ交通の要路に當り、雜多な人種民族、あるいは世界各地からの宗教、學問、そして物資をあつめ、さながら文化のるつぼの如き感がありました。このよきな所の通弊として、コリントは歎樂にみちていました。「コリント風に生きる」といふことが、今日のいわゆるプレイボーイの生きかたを形容することばであつたことからも、そのことがうかがわれます。ガマリエル門下の逸材として、當時の最高の學識を身につけ、福音のためにには、どのような苦労をもいとわないで働いてきたパウロが、この歎樂の都を前にして「瞬たじろがずにはおれなかつた」といふことは、いつたいどういうことなのでしよう。しかし考へてみると、はじめから不安やおそれを伴わないでやれるよきな伝道があるでしようか。福音は「よろこびのおとすれ」ですが、それは同時に、この世に対するはげしい挑戦です。そして私たちはこの世的な力の強さを決してみくびることはできません。パウロの不安は決して單なる杞憂ではあり得ませんでした。パウロが苦労して導いたコリントの信者の中に、町の惡風になじんで「異邦人の間にもないほどの不品行」と彼を嘆かせるものがのちにあらわれるようになつた(コリント5と6章参照)ことも、この世の惡魔の力の強さを示すものでしょ。また、彼がアクラ、ブリスキラ夫妻やテモテ、シラスという有能な弟子たちの協力でみことばを伝えることに専念できるようになつたとき、彼はユダヤ人たちのはげしい反抗を経験しなければなりませんでした。(使徒行伝18

○

神学校を卒業してすぐに赴任した小倉の地は私にとつて、さながらコリントのごとく感じられました。神学生最後の夏期奉仕に小倉教会に招かれたときの印象は今でも忘れられませんが、舗装されたばかりの浅香通りに面して、ハバナというキヤバレーがいやに大きく目にうつり、現在の会堂と日立ビルが建てられる前の広い空地を隔にもつたジョン・カルミンの会堂はいかにもみすぼらしく感じられたものでした。隣りはお寺、そしてむかいにはお福荷さんがでんとかまえていたのも、異教社会に福音をのべ伝えていくことのむつかしさを象徴しているかのように思いました。魚町を人波にもまれて歩きながら、自分がまるで異邦人であるかのような疎外感を抱かされたこともありました。みな忙しそうでした。商店は美しく装つて客をひきつけ、旦過市場は活気にあふれて、人が生きるのはパンによるのだ、といふ事実をいやでも承認させようとします。都会の巨大なエネルギーの前で、教会とか伝道とかいつてはる私たちのわざはいつたい何になるのだろうか、というような気持にふとおそわれることも何回もありました。

「ユダヤ人はしるしを誇り、ギリシャ人は知恵を求める」とパウロは言いますがそのユダヤ人とギリシャ人は今日の社会にも存在しています。幸福になれるといふ「しるし」がみえる、あるいは実感されるようなところには、人びとが殺到し、知恵のにおいのするところには多くのものがむらがるのであります。伸びやむ教会の現状に対し、教をたのみとする世間的な考え方から、しるしや知恵をもつと身につけさえすればとみがまえようとしたこともあります。そして、なかなかそれができない自分の無能が時にうらめしくもありました。

私は福音を語るために赴くことを命じられたところを前に、あるいはその中にみこんでからもなお「弱く、かつておそれ、ひどく不安であつた」のです。

ペウロはコリントの町を前にたじろぎながらも、勇気をふるい起して福音を伝えました。いつたい何が恐れの中から彼をふるい立たせたのでしょうか。少くとも二つのことが指摘できます。

「十字架につけられたキリスト以外のことは何も知らない」と決心した」と言つていますが、かつてアテネでの伝道

においてパウロはその学識を傾け、堂々たる神学論を展開して福音を伝えようとした。（使徒行伝17章）しかし、その伝道は成功とはいえませんでした。彼はそこで、人間の知恵や力が人を救いに導くものではないということを、あらためて教えられたのはなかつたでしょうか。人を救うのは神の力であり、神はイエスの十字架を通して、信じるものを救うこととされたのです。なまじ、自分の力に頼もうとする気持があるから、それを上廻るものに対して不安やおそれを感じるのではないか。いつそ無力に徹することです。そのときにこそ福音の本当の力があらわされるのです。このように考え及んだとき、彼はもはや福音を語ることにためらう必要はなかつたのです。

「恐れるな。語り続けよ。黙つてはいるな。あなたには私がついてる。だれもあなたを襲つて、危害を加えるよう、なことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる」（使徒行伝18・9と10）ユダヤ人の反抗に出会つたあと、幻のうちに主はパウロにそのように言われたのでした。コリント伝道を中止しようとまでは思つていなかつたかも知れません。しかし、ユダヤ人たちのはげしいののしりの中で、パウロは「今からわたしは異邦人の方に行く」と行つて神を敬うテテオ・エストという人のところへ引きあげたのでした。語ることばが受け入れられないとき、私たちはしばしばそれ以上そこにとどまることが愚しいことと考えます。自分を受け入れてくれるところをたずね、そこに安住しようとします。しかし、主は言われるのでした。「語り続けよ」なぜなら「この町にはわたしの民が大ぜいいる」からだと言われます。私たちの語ることばにまるで耳をかさないようみえるものも、主にとつては救われるべきものなのです。人の目には神の民と思えないようなものも、主の目には見えられています。パウロ自身かつてそうだつたではありませんか。そして主は、そのことをわきまえずに神に反抗し、神の愛を拒もうとするようなもののために十字架にかかりて下さつたのではないでしょうか。パウロはコリントに一年六ヶ月とどまりました。神が共におられるという確信も与えられて、彼はいわゆる「腰をすえて」（18・11）神のことばを語り続けたのでした。

無力であることに、時としてみじめさを感じながらも十年余の間、小僧にとどまつて曲りなりにもみことばを語り続けることができたことは、主の限りない恩寵と主にある兄弟姉妹のあたたかい同情の賜物に外なりません。それと

ともに、抱みようのない召命の事実が恐れの故に逃げ出そうとする私をとらえではなきなかつたこともたしかでした。

耐えがたく思つたこともあります。しかしその苦しみのはざまであり仰がされたのは十字架の主でした。

今のがまだ建築中のことです。外形がほほ出来上つて特徴のある屋根が瓦がぶかれののを待つていました。数日間の旅行から夕やみ迫る頃、教会にたどりついた私は一瞬、等身大の十字架のかげに息をのみました。それは屋根の上に取付けるために用意された十字架だつたのですが、十字架のリアリティといふことをその時ほど強く感じたことはありませんでした。十字架はキリスト教のシンボルだといいます。たしかに十字架なしにキリスト教はありません。しかし私たちとはそれを決して单なるシンボルとして屋根の上や床の間に飾りつけておくようなことをしてはならないと思います。その様な私たちでの象徴化といふことが実は信仰の抽象化あるいは形骸化を招いているのではないでしょか。象徴化といふことの中で十字架は次第にかたちのととのつた美しい、きやびらかな装飾品として人びとに愛用されるようになつています。しかし、本当の十字架はそんなものではありません。ユダヤ人はつまづきでしかなかつたのです。だから十字架をかけるということは、本当は勇気がいることなのです。それは自分のおろかさを告白することだからです。けれども、私たちのおろかさが本当に告白されるところに神の力が完全にあらわされるのです。

小倉教会の十字架は、決してかざりではないし、あつてはなりません。大きさをいたずらに誇るのではありません。しかし、等身大の十字架に私たちとは主のみ姿を目を見開いてみつめようではありませんか。十字架の主を人びとともにと大胆にさし示すではありませんか。十字架を誇りとする教会であつてほしいと思います。何よりも十字架のことばを語り続ける教会であるようにと祈ります。教会のすべての奉仕が、そのことにむけられてだれひとりとして洩れるものがないように、たとえ、スリッパを並べ、会堂のちりを拾うというようなささやかなわざにも、十字架の主をあらわす真剣さと熱心さをもつて、互いにそのわざを尊びあおうではありませんか。

小倉教会で与えられた、言いつくすことのできない数々の感謝をいたいで、私は新しく与えられたつとめに起きます。そこで十字架をかけて、せい一杯に働くと願つています。お互に、十字架をもつと高くかけ、十字架のことばをもつと力強く語り続けていきましょう。皆様のよき働きのために祈っています。私のためにもお祈りください。

眞実を表わす

一青年会の「文集」発刊に寄せて一

わたしの支持するわがしもべ
わたしの喜ぶわが選び人を見よ

わたしはわが靈を彼に与えた

彼はもろもろの國びとに道をしめす

彼は叫ぶことなく、声をあげることなく
その声をちまたに聞えさせず

また傷ついた葦を折ることなく
ほのぐらい灯心を消すことなく

眞実をもつて道をしめす

彼は衰えず落胆せず

ついに道を地に確立する

海沿いの国々はその教えを待ち望む

(イザヤ書 42・1~4 より)

青年の有志によつて、「文集」が久しうぶりに発刊され
ようとしていることは、たいへんうれしいことです。
「文は人なり」といいますがその内容がいかにもあれ、
隨筆や感想文でも、あるいは私小説的告白や懷疑の表明
であつても、それらのものを通して、一人の人間の眞実

にふれる事ができるからです。この「眞実にふれる」
あるいは「眞実をあらわす」という努力が、卒直に言つ
て、私たちの間に欠けていたのではなかつたでしようか。

むしろ、私たちの時代がたしかに見失いつつあるものだ
と言わねばなりません。今日の発達した物質文明は、物
に依存することを教えて、人間相互の信頼に生きるとい
うことを次第におろかしく、わずらわしいことだと思わ
せています。今や多くの人が物に関心は抱いても、人間
に関心を寄せようとはしないのです。関心がむけられて
いるようにみえてもそれは「もの」としての人間でしか
ないのであります。つまり、自分にとつて利用価値がある限り

に於て、ということなのです。そのような世界で人間の
眞実にふれるということは、まず期待できないこ
とでしよう。おそらく今までの人間不信が渦を巻いて、
人間をメカニズムのるつぼの中に投げ込んでいる。この

現実を私たちは直視しなければならないと思います。

しかし、私たちはこの現実の中に「神はそのひとり子を
賜わつたほどにこの世を愛して下さつた」というおどろ
くべき出来事を知らされているのです。
イエス・キリストはペツレヘムの馬小屋で貧しい大工の
子としてお生れになりました。そして、あの十字架の死
に至るまで、全くみるかげもない放浪の一教師としての
生涯をおくれました。だれがその姿に救主と思うこ

とができたでしようか。私たちの肉の目には救主の姿はかくされています。私たちの肉の思いには、十字架を通して神の真実など考えようもありません。多人のユダヤ人にとつて、それはつまづきでしかなかつたのでした。しかし、パウロが「みたまではじめた」（ガラテヤ3・3）と語っているように、私たちはみたまによつて、みえないものを見、きこえないものをきくことができる信仰の世界に導いていただいたのではなかつたでしようか。それでもかわらず「今になつて肉で仕上げるというのか」（ガラテヤ3・3）ふたたび、肉の思いによつて歩こうとはいひないか、目を注ぎ、心を傾けるところを間違つてきはいなか、反省しなければならないと思うのです。

人のうわべだけで、ものごとを判断するものは、自分のうわべをかざろうとせざにはおれません。自分の欠点や弱点を指摘されまいとみがまえるからです。お互いやがそのようにみがまえ、見栄を張りあつているところでは、このような文集は決して生れなかつたでしよう。くりかえして言いますがそれだけに私はこの文集がたとえわざかの人によつてつくられたものであつても、私たちの現実を打破して行く一つのこころみとしてはじまつたことを心からよろこばずにはおれないのです。

「はじまつた」ということを私は強調したいと思います。過去にも何回となくこのようなこころみがくりかえされてきました。しかし、私は決してそう思いません。たとえ現

象的にはそうであつても今ここで「はじまつた」ことの意義を私たちは大切にしたいと思います。
最後のこころみ、これで駄目ならというような悲壮感がもしあれば拭わねばなりません。私は必ずこのようなこころみが今まで繰返えされたものも含めて実を結ぶことを確信しています。そしてこのようなわざに招かれていることをお互いにもつと自覚しようではないかと訴えたいのです。お互いのボロをさらけ出して、だからこそ「まことである方」にひたすらがり、教えられ、慰められ、はげまされて歩こうとしているそのような人間の真実を互いにあらわし、認め、貫いていこうではありませんか。（昭和42年12月）

アンテオケの教会

使徒行伝 11・19～30

航行する船にとつて、嵐の中でも搖ぐことなく光を輝かす灯台の存在にまさつて心強く感じられるものはあるまい。やみが暗ければくらいだけ光はその輝きを増す。嵐が暴威をふるえばふるうだけ、一筋の光に托す希望は大きい。

アンテオケの教会は、初代の信徒たちにとつて、まさに暗夜に光を掲げる灯台であつた。教会のあるべき姿をこのアンテオケの教会に学んでみよう。

第一に、このアンテオケではじめてギリシャ人にも福音が伝えられ、信じて主に帰依するものが多く出た。キリスト教はそれまで考えられていたユダヤ教の一分派的なからを破つて、主イエスが云われたように、全世界に及ぶ救いの力をあらわしはじめたのである。それまでは「ユダヤ人以外の者には、だれにも御言を語つていなかつた」（19節）その機会がなかつたこともあろうが、最初の弟子たちのうちに、狭い民族主義にとらわれて異邦人の救いにはまるで無関心な人たちが少くなかつた。ベテロですらキリストの救いはユダヤ人だけのものだと考えていたようである。コルネリオのことがあつて、はじ

めて彼は「神は人をかたより見ない方で、神を敬い、義を行なうものは、どの国民でも受入れて下さることがはんとうによくわかつてきました」（10章参照）と告白している。

先日、ライフルで人びとをおどし旅館に籠城した金嬉老のことが報じられた。私の親しい友人である韓国教会の崔先生がそのために奔走されたことも新聞に出ていたが、犯罪そのものはどのような理由によつても正当化されはならない。とはいえ、私たちはあの不幸な事件の背後に、いわゆる「しいたげられたもの」の意識があつたことは否定できない。事実、戦前に於ける差別と偏見は子供心に、何故あれほどにといぶかるような場面をしばしは経験させられたし、今日でも多くの人のことばのはしにそのようなことが感じられる場合が少くない。米国の黒人問題にまゆをひそめながら、私たち自身が多くの民族的偏見や人種的差別感に支配されていることに気付いていない、というのではなくならない。人種や民族的なことだけではない身分や職業、階級意識、さらには肌合いとか趣味によつて何と多くの偏見や差別感がみられることだろう。互いにそのようなものに支配されて、自分の領域にとじこもり、手をさし出そうともしない臆病と怠慢がある。

しかし、福音は「すべての民に与えられる」よろこびのおとずれである。神の前にはユダヤ人とギリシャ人、

自由人と奴隸、男と女の区別はない。「同一の主が万民の主であつて彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるのである」（ローマ10・12）アンテオケでギリシャ人にも福音が伝えられたことは当然のことであつた。しかし当然のことができない世界の中で、それをきましたげている壁をうち破つて、福音の光を輝かすことになつた。その意味で注目すべき出来事であつた。

○

第二に、このアンテオケではじめて弟子たちがクリスチヤンと呼ばれるようになつたということである。今日「クリスチヤン」という呼び名はごく当たり前であり、人前でそういうことに、その名に対してふさわしいとはいえない気はざかしさは感じても、決してきこえの悪いものではない。しかし、これは当初、他の人びとから、いささかの軽蔑とやゆ、あるいは時に憎悪をこめて語られた名であった。しかし、それはそれほどに信徒たちの生活が、一般の人びとときわ立つて違つていたからではなかつただろうか。無視できないほどに無関心ではあり得ないほどにキリストを信じるものとしての生活があざやかにあらわされていたからに違ひない。

クリスチヤンとは「キリストアノス」即ち「キリストのもの」ということである。何ごとにつけ「キリスト」ということばが彼らの口のはにのぼり、生活の一こま一こまに「キリストによつて」「キリストのために」という

願いと態度があらわされていた。そのような信徒たちをみて「キリストきちがい」とでもいうような氣持でつけてあつたろう。しかし、それでよいではないか。むしろ、そうあるべきではないか。キリストアノス、キリストのもの、キリストに属するものである。他のいかなるものにでもなく、「キリストこそわが生命、私の主です」と私たちは告白せしめられたものではないか。

かつて、九大の総長をされた荒川文六先生は、日本にける日曜学校運動のすぐれた指導者の一人であるが、九大総長在職中「私の本職は日曜学校の教師です」といわれたそうである。

それはクリスチヤンとして知られることこそが本望だといふ意味ではないだろうか。「生きるにも、死ぬにも、私の身によつてキリストが崇められる」とを心から願つたいたい。キリストに属するものとしての自分を常にあらわしていきたい。「あなたがたの光を輝かせ」といわれたその光とは、私たちのうちに与えられたキリストご自身に外ならないのである。

第三に、ユダヤの信徒を助けるためにアンテオケの信徒たちは、それぞれの力に応じて、援助の手をさしのべた。彼らは、口先でキリストのことを語つていたのではなく。愛によつて働く信仰（ガラテヤ5・6）を豊かに持つていた。その頃、外国人の救いに関する問題で、

ユダヤの教会とアンテオケ教会とは必ずしもよい関係にあるとはいえない。しかしそのようないきさつがある、彼らは現に苦しんでいるユダヤの教会を黙つてみすごすことはできなかつた。愛は目の前の人（それがどのような人であれ）の窮乏に手をさし出すことである。主が教えられた「よきサマリヤ人の譬」もそのことを示されたのではなかつたか。愛は人をくらべたり、価値の有無を問わない。隣人の窮乏にやわらかく反応していくことである。お互のものわからあつて行くことである。アンテオケの教会が豊かだつたわけではない。しかし彼らも、あのマケドニヤの諸教会と同じように、あふれ出て惜しみなく施す富を（Ⅱコリント8・1～2）持つていたのだ。貧しさをうるおす力がそこにある。世界を変革するものはそのような愛である。そしてその愛は「神から出たものなのである」（Iヨハネ4・7）

○ 最後に、私たちはこのアンテオケ教会についての聖書の二つの重要な証言に注目しなければならない。

「主のみ手が彼らと共にあつたので」（11・21）「聖靈が：：告げた」（13・2）ということである。アンテオケ教会のすぐれた教會としての働きは、そこに集つた人びとが特別に優秀な人材であつたということによるのではなく、主のみ手がたえず彼らと共にあつたといふことなのだ。そして、それこそ弱い私たちが、弱さの故に氣おちしたり、ためらつたりすることなく、与えられたつとめに耐えすすんで、主の光を輝かすことができる力なのだ。主は従うものを決してはずかしめられない。聖靈の導きに従つて歩むことを学び続けようではないか。

第四に、アンテオケが、伝道者をおくり出す教会であつたということを学びたい。（使徒行伝13・1～3）ロングビュの教会を訪れたときに驚いたのは、その大きさもあつたが、それ以上に訪問伝道の徹底した組織と働きであつた。外に出て行くということを私たちには学ばなければならぬ。ピリー・グラハム博士のことを評してある人は「キリスト教のセールスマン」といった。その伝道方式に対する批判はあつても「全世界に出て行つ

イエスの宮潔め

マルコ 11・12・33

この記事は四つの福音書に共通してみられる。それだけに目撃者たちにとつて、一様に強烈な印象を与えられたものであつたに違いない。

その頃、エルサレム神殿はヘロデ大王の手によつて大規模な修築工事が行われていた。紀元前十九年に着工してなお工事が続行していたといわれるだけに、その豪華さは目をみはらせるものがあつた。マルコ13・1には弟子たちの感嘆のことばが記されている。神殿の庭は内と外にわけられ、異邦人は内庭に入ることを禁じられていた。15節の宮の庭とは外庭のことであろう。そこには参詣者の便宜をはかるために、礼拝のさいさげる犠牲の動物を売る商人やギリシャ、ローマの通貨を神殿用のお金にかかる両替人が店を出してちょうど門前市のような賑いをみせていた。それは、だからエルサレム神殿に於ける礼拝の盛んなことを示すものであつた。立派な神殿に参詣者の姿はあとをとどめず、はとを売る商人の店や両替人たちの商売も繁賑している。その様子をみながら祭司長たちはきわめて満足感を味つていたに違ない。ところがイエスは神殿に来られるなり、宮の庭で売り買いでいるものを追い出し、商人たちの台や腰掛をくつが

えされた。ヨハネは「なわでむちを造り」と記しているが、イエスのはげしい怒りがいつそうあざやかである。そして言われた。「あなたがたは神殿を強盗の巣にしてしまつた」柔和なイエスがむちをふるい強盗とのしらされたのである。ヨハネは「あなたの家を思う熱心があなたをくいつくすであろう」(ヨハネ2・17 // 詩69・9)ということばを出したと記している。十字架はいつもそういう避けがたいものになつた。祭司長たちの怒りと憎しみはそれこそ油に火を注ぐ様になつたのである。イエスはそのようなことは十分ご承知であつたに違ない。しかしあえてこのことをなきつたのである。その前の日、イエスは柔和な者としてエルサレムに入城された。そのイエスのはげしい怒り、身を渡ぼすほどの激情を私たちは深くたずねてみなければならぬ。イエスは何をそこで示しておられるのだろうか。

○

それは第一に、形式的礼拝あるいは宗教に対する警告である。神殿の豪華さに感嘆した弟子たちに対しても、イエスはいかに外形のすばらしさを誇つても、それはやがてばらばらにくずれ去ることを予言された。事実、數十年後、ローマの軍隊によつて神殿は崩壊するのであるが、ルカは、イエスが神殿をみて泣かれたことを伝えている。ヘルカ19・41と46)外形ばかり誇つても内側に於て何のそなえもないものの悲劇的な結果をイエスは告げておら

れるのだ。この官能的と前後して記されている枯れたいちじくの木の物語はこのことを象徴的にあらわしている。葉ばかり繁つて実のないいちじくの木は形式主義にお入り、中味の失われた、従つて人びとに本当のよろこびもいのちも与えることができないユダヤの神殿礼拝をあらわすものである。それは神の審判に耐えることができる。イエスはこのことを通して、弟子たちに祈ることを教えた。(22-26)外形的なものにではなく内なるものへの信頼と服従に生きるべきことを教えておられるのである。神の前に飾つて出る必要はない。子供が父親に対するような、そうしたかぎりのない卒直な、しかも信頼にみちた祈りにあらわされる信仰生活を望んでおられるのである。「祈りの寮となえられる」とはイヤザル56・7からの引用であるが、それは、それこそ見栄や外聞にとらわれず神と対座できるところだということである。かたちではなく真心があらわされるべきところだということである。中味のないものほど外面を飾ろうとする。宗教が外形を気にするようになつたときは、その生命が枯渇したことであらわすのだ。警戒すべきことである。

○
第二に、それはいわゆるご利益宗教に対する警告である。ヨハネによると「商売の家とするな」といわれた。神殿を自分の利益をはかるための手段としていることに

対して、イエスははげしいきどおりを示しておられるのである。人間同志の交わりでもそうだが、利益によつて結びつくということほど相手の人格をきずつけることはない。昔の人は「友遠方より来る。また樂しからずや」と人生における出会いのよろこび、友を見出した感動をうたつてゐる。しかし私たちとは今日、このようなよろこびや感動に次第に乏しくなつてはいないだろうか。利用し利用される関係でしかお互見ることができなくなつてゐるのだ。つまり人間がもはや人間としてではなく利用する道具となつてゐるということである。おそらく不幸なことではないか。しかしそれは「神を神としてあがめない」(ローマ1・21)ことの当然の帰結なのである。神を認めようともしない人が多い反面、ご利益のために信心を求める人もまた少くない。いわば神は人間の利益追及のための一つの手段でしかないのだ。これほどに神の人格性を無視し、冒瀆することがあらうか。たしかにイエスは「求めよ。そうすれば与えられるであろう」といわれた。しかし、それは祈り求める前から私たちが必要なものを知り、時機にかなう助けをもつて導いて下さる神の愛とあわれみが土台となつてゐるのだ。神は「ご自分のみ子をさえ惜しまないで私たちために死にわたされた」(ローマ8・32)それほどまでに私たち一人ひとりを大切にがえりみて下さつてゐる。私たちがそこなわることをおゆるしにならない。神の生

命がけの愛が私たち一人ひとりに注がれている。そのことをわきまえないときには、私たちはがりがり亡者のようになり、人であれ、神であれ自分の利益をはかるための道具とせざるを得ないのである。愛にうえた世界は、はげしい利益追及にあけくれる緊張と不安にやすまるいともならない。過度の緊張はしばしば暴動や狂乱となつてあらわされる。それはまさに神を神としてあがめることを知らないために深く病む人間社会の現実ではないか。

○

イエスの怒りはむしろ悲しみではなかつただろうか。眞の人間性の回復をイエスは願つておられるのである。

第三に、私たちはイエスの主権ということを学ばなければならない。「何の權威によつて」と祭司長たちはたずねたが、イエスは、汚れた神殿をこぼち、新しい神の宮をたてる力をもつた神の主権をもつて神殿にのぞんでおられるのである。だから、イエスは「この神殿をこわしたら、わたしは三日の中に、それを起すであろう」（ヨハネ2・19）といわれた。「これは、ご自分のかたちである神殿のことを言わされたのだ」とヨハネが注解しているように、神殿による形式的な、そして利益のみを追い求めるような礼拝に象徴される古い生活はイエスによつてこわされ、新しい生活がイエスによつてはじましたことを聖書はあかししているのである。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られたものである」（IIコリント5・17）「あなたたちは神の宮であつて、神の御靈が自分のうちに宿つていることをしらないのか。もし人が神の宮を破かいするなら、神はその人を滅すであろう」（Iコリント3・16、17）
「あなたがたは、以前の生活に属する。性欲に迷つて滅び行く古き人を脱ぎすて、心の深みまで新たにされて、眞の義と聖とをそなえた神にかたどつて造られた新しい人を着るべきである」（エペソ4・22～24）これらの証言に耳をかたむけ「こういうわけだから、あなたがたは偽りをすべて、おのおの隣人に對して眞実を語りなさい」（エペソ4・25）といわれるすすめのことばを心から受入れていこうではないか。「自分のからだをもつて、神の榮光をあらわす」（Iコリント6・20）ことに心をかたむけようではないか。

（昭43・4）

不信をぬぐうもの

マルコ 16・9-1 20

パリに於けるベトナム和平交渉に全世界の耳目が集中しているが、五月十九日付の朝日ジャーナルには「体験者フランクの役割」という論文が記載されている。一九五四年五月ディエンビエンフーで決定的な敗北をきついたフランスはマンデスフランスを新しい首班にむかえるのであるが、平和を願う世論を背景に和平交渉に乗り出したにもかかわらず、はかばかしく進まないことに胸を痛めたマンデスフランスはラジオを通じて、次のように国民に訴えた。「ここで一緒に平和をさがし求めてきている人たちの間に、根強い、胸苦しい不信が認められます。……これこそは私たちの作業にのしかかっているもつとも重苦しい重石であり、平和維持にとつて、現在から未来にかけての、もつとも重大な脅威なのです」不信心こそ、私たちの生活にとつても、もつとも重大な脅威なのである。

「自分の穴の中で」という石川達三の小説があるが、それは現代人の中にうごめくエゴイズムと不信が、いかに人間を孤立化させているかといふことを鋭くついた作品である。人を信じることも、従つて他と結びつくこともできないでいる孤独な世界が、いかに多くの恐れと憎しみにみちていることか。芥川の「孤独地獄」という作品のことを説明するまでもあるまい。

しかし、いつたい不信ということは今日に於ける特異な現象なのだろうか。聖書は、それがまさに人間の偽りのない現実であることを描寫している。聖書は神の恵みの託言であるとともに人間の不信にみちた生活の記録といつてよし。創世記は人間の創造物語に引き続いて墮罪物語を紹介しているが、神のことばにそむいた人間は木の葉をまとめて木のしげみに姿をかくした。神への不信は人間をかけにひそませたのだ。そして、その中で互いに「あの女が」「あの蛇が」と他を中傷し、責任を転嫁しあつているのだ。イエスの弟子たちも、不信ということからへだたつた存在ではありませんなかつた。たとえばマルコ9・14／29をみると、イエスは「ああ、なんという不信仰な時代であろう」と嘆じておられる。一人の不幸な少年をめぐつて、律法学者もイエスの弟子たちも、まるで無力でありますながら、いたずらな議論に時をついていた。かつて弟子たちは伝道につかわされ多くの成果を得て帰つてきた。そして「主よ、あなたの名によつていたしますと、惡靈までがわたしたちに服従します」（マルコ10・17）と報告している。しかし、前

の力が信じるものを通して働くのであって、かつてどのような力をあらわし得たとしても、今、イエスにしつかりと

結びついていなければ、イエスの弟子ということは人びとの嘲笑を招く外はないのである。イエスは「信じるものには、どんなことでもできる」といわれたが、何という無力が私たちを包んでいることか。それはまさしく不信のあらわれである。また、主が選えられたとき、弟子たちはそれを信じることができなかつた。彼らはユダヤ人を恐れて、口をかたく閉じていた。(ヨハネ20・19)不信にみちた世界は閉鎖的であり、不安とおそれとにみちている。あの弟子たちも、そのような不信からのがれることはできなかつたのである。

○

主は、そのようなところにおいてになつた。「主は、ほんとうに選えつて、シモンに現われなさつた」(ルカ24・34)マルコは「十一弟子が食卓についているところに」イエスが現われたと語つてゐる。「食卓に」ということは、あの最後の晩餐の光景を思い起させる。あの時、主は弟子たちを「最後まで愛し通された」(ヨハネ13・1)。ユダの裏切りは決定的であり、ペテロが主を否むことも既に主は予見しておられた。その上で、主はパンをさき、杯をとつて弟子たちに与えられたのであつた。そして、それから間もなく主は十字架にかけられた。十字架は人間の不信の中にある神の愛の眞実なのである。疑うトマスには、手のひらの十字架の釘あとを示して言われた「信じな

るものにならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20・27)不信のはさまに十字架の愛があらわされたといふこと、これが福音である。不信にぬりたくられた壁の内側で、あるとき、急に目覚めたというのではなく、主が外側から声を叩き、呼びさまでして下さつたのである。

主が、不信仰と心のかたくななことをお責めになつたとき、弟子たちは、嵐の海での(マルコ4・35-41)あるいは変貌の山の下での出来事を思い起すことができたのではなかつただろうか。

さらに主は弟子たちに言われた。「全世界に出て行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」。「出て行つて」と言われる。悪霊につかれ「自由をうばわれている人にむかつて主が「けがれた靈よ、この人から出て行け」と命じられる」とは出て行き、その人はいやされた。(マルコ9・25-27)そのように、イエスのみことばは私たちを同じめているところから解き放つ力である。伝道は使命である。しかし、私は使命以上のものだと思う。恵みである。何故ならば、そのことに於て、私たちは閉ざされた世界から真に解放されるからである。

弟子たちは出て行つて、至るところで福音をのべ伝えた。主も彼らと共に働き、みことばに伴うしるしをもつて、その確かなことをお示しなつた。不信がぬぐわれたところには、みことばへのひたすらな服従がみられる。そして主

のみことばに「おことばですから」と単純に従うとき、私たちは主の力の絶大さにおどろかずにはおれないものである。信仰はおどろきである。感動である。そして、それこそが私たちの人生を変革し、世界を動かしていく力ではないか。(昭43年5月)

思いわざらうな

マタイ6・25 / 34

イエスは自然を愛されたかたであつた。野に咲く一輪の花に、ソロモンの栄華も及ばない美しさを認められた。しかし、それは花の美しさを讃美するためではなかつた。「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の花である。神はこのように装つて下さるのなら、あなたがたにそれ以上よくして下さらないはずがあろうか」と言われたのである。「だから思いわざらうな」これが主イエスが私たちに語りかけておられる言葉である。

思いわざらうとは心がさまざまに亂れ、分裂する状態のことであるが、私たちの生活は更に多くの思いわざらいに

みちている。そして、それは私たちが人を愛し、誠実に人生を歩もうとするときに、むしろ不可避のことだといわねばならない。子供のために心をわざらわさない親があるだろうか。出張した夫の身を案じない妻があろうか。誠実に仕事に取り組むとき、悩まずにすむ人があろうか。人生をどまかさずに生きようとするとき、私たちは思いわざらいからのがれることはできない。それ故に「思いわざらうな」という主のみことばは私たちをどまかしのない現実によびます鐘でもある。しかし同時に思いわざらしい現実から私たちを解放する力である。このみことばの背後に語られている主のみこころはどのようなことか。テキストに従つて三つのことを学んでみよう。

○

誠実さということは大切なことである。しかし、誠実さ故に思いわざらいからのがれ得ないとき、そこに信頼が欠けていることを指摘しなければならない。「思いわざらうな」と語られた主は「野の花以上に神がよくして下さらないはずがあろうか」とさとして「ああ、信仰の薄い者たちよ」と言われた。不信仰をきめつけでおられるのではない。信仰が知識にとどまつて、自分の一切を神におまかせすることができないでいる者を、たしなめ、はげましておられるのだ。

嵐の海で弟子たちは叫んだ。「主よお助け下さい。わたしたちは死にそうです」(マタイ8・23 / 27から)イエス

は舟の中で眠りておられた。一日の労働のこじらよい疲れが夢路をたどらせる。それはまことにやすらぎにみちた姿であつた。荒れ狂う波にもあびやかされることのない、一切を神のみ手にゆだねきつた平安がそこにはあつた。弟子たちの姿は対照的である。彼らはイエスの力をたしかに知つてゐる。しかし、眠つておられるイエスのみ姿から、平安を学び得ないで、むしろ不安とおそれ、そしていらだしさを受けとつてゐるのだ。信仰が知識におわると、信仰は私たちを助けることはできない。厳密な意味で、そのようなものを信仰と呼べるだらうか。しかし、私たちはここで、弟子たちが不安やおそれの中から「主よお助け下さい」と叫んだことに注目したい。私たちは「不信体であるためにさまざま思いわざらいの中にある。しかしそれがどこにむかつて訴えられているか。そのことが問題ではないか。弟子たちの訴えに対し、主イエスはその不信体を指摘されながらも、すぐにこたえて下さつた。弟子たちは驚いて言つた。「このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは」。ここには知識の信仰から体験の信仰への飛躍がある。逆説的だが、思いわざらいは、信頼の欠如によるものであるが、それは私たちを本当の信仰に導く教師であるともいえる。だから「思いわざらいを一切神にゆだねるがよい」(ペテロ5・7)とすすめられている。これは思いわざらいのない完全な生活を私たちに要求するものではない。思いわざらいに目をとめ、それを主のもと

にたずさえて行くことがゆるされているということなのだ。

○

「まず神の国とその義とを求めるなさい」と主は言われる。

まず何が求められているか。何がもつとも必要なものか。マルタとマリヤの家を訪ねられたとき、主は言われた「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配つて思いつづらつてゐる。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである」(ルカ10・38-42から)今日「多忙」ということばは一種の流行語である。それとともにノイローゼ等の精神疾患も激増している。余りにも多くのことにとらわれているのだ。あれも、これもと考案ながらやりきれないでいるのだ。「まず神の国と、その義とを求めよ。そうすれば必要なものは添えて与えられる」と主は約束しておられる。何が人を本当に生かすものか。聖書は

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る」一つ一つの言で生きるものである」と教える。(申命記8・3)(マタイ4・4)神が人を生かして下さるのである。主は「神と富とに兼ね仕えることはできない」(マタイ16・24)といわれたが、もし神を信じるといいながら富に仕え、富に心をうばわれるならば二心のものであり、思いわざらいから解放されないばかりか、やがては魂を失わざにはおれないであろう。必要なものは神が与えて下さるのだ。それが故、心配しないで「ただみ国を求めるなさい」(ルカ12・31)といわれるのである。

○

「一日の苦労は、その日一日だけで十分である」と主は言われた。昔、イスラエル民族が荒野の旅を続けていたとき、神はマナをもつて彼らを養われたが、毎朝一日ぶんしか集めることをゆるされなかつた。翌朝に残しておいたものは虫がついて臭くなつていた。(出エジプト16章) 今日を養つて下さった主が明日をどうして養つて下さらないはずがあらうか。それを忘れて明日のたくわえがあるから

といふことで安心しようとするのはおろかなことである。

(ルカ12・15～21参照) 明日は主のみ手にあるのだ。明日は、神のゆるしがあれば明日生きればよい。大切なこと

は今を生きるといふことではないか。過去を追憶しながら貯えたものを食いつぶすような生きかたや、何もしないで

未来をいたずらに夢想するといった態度は断じていましめられねばならない。信仰は、「今、ここで一神から問われていることに対する応答の生活である。今という時をのぞいて、どうして生きた信仰を求めることができるだろうか。

私は学生時代に、英会話が苦手で教師の質問にしばしば首をくみてこたえることをおこたつた。英語が今もつてでききないのは、そのようないいかけんな態度のむくいであるが、それだけではなく苦手な英会話の時間を、そのような態度を示すことによつて、益々憂うつなものにしていたのである。たとえ苦手でも教師の質問を真剣に受けとめてこ

たえようとする態度を学ぶべきであつた。今そのことをひそかに悔いながら、神から問われている人生を英会話を同じようににしてしまつては大変だと思う。神から問われて、いはゞ一途に生きることを学びたいものである。そのような張りのある生活に、どうして思いわずらいが入りこみ得るだらうか。

(昭43年花の日)

一致を守り続けなさく

エベソ4・1～6

戦国時代の武将、毛利成就がその臨終の床に三人の息子を呼んでさとした三矢の教えは、昔から、いわゆる兄弟仲良く、力をあわせることの必要を説いたすぐれたたとえとしてよく用いられていく。伝道の書にも「三つよりの綱はたやすくは切れないとある。伝道の書は旧約の知恵文学に属するものであるが、協力一致ということは、たしかに処世の大切な知恵の一つである。一致のないとこ

ろでは衆にすぐれた人も十分な力をあらわすことはできな

いし、いかに多くの人が集つていても一致に欠けるならば、それは烏合の衆にすぎない。一致は力である。

しかし、一致がありさえすればよいというのではない。バベルの塔は、外国に散らされることを恐れた人びとによつてつくられた。(創11・1~4)彼らはたしかに分裂ではなく一致を求めた。一つの民となるために努めたのである。

しかしその努力は実を結ばず、かえつて分裂を招いたのであつた。聖書はそれが彼ら自身の名をあげようとしたためであつたことを暗示している。これに類似した悲劇は今日も数多くみられるのではないか。一致の目的が自分自身の名をあげる」ためであるかぎり、つまり自分にとって都合のよい、自分勝手な欲求にもとづくかぎり、一致への努力は逆の結果を招くほかはないのである。

○
……」とある。

何故ならば、一致は神ご自身の本質にかかわることだからである。テキストの後半(4~6)にはいわゆる三位一体の神が語られている。パウロはまた一致をさとしたコリント第一の手紙12章の中で「靈の賜物は種々あるが御靈は同じである。務は種々あるが、主は同じである。働きは種種あるが、すべてのものの中に働いてすべてのこととなさる神は、同じである」(4~6)と注意深く三位一体の神を告白することによって一致の根拠をあきらかに示しているのである。

初代教会がきびしい迫害にさらされ、おびやかされながらも、勇敢に前進することができたのは一つには使徒行伝2・43、17に記されているような美しい交わりと協力があつたからである。彼らは一致協力によつて、きびしい時代の嵐を克服できる力を示したのである。使徒パウロも教会に対して、一致を守れとしばしばすすめている。たとえばヨハネ17章は「大祭司の祈り」といわれるものであるが、主イエスは「わたしたちが（即ち神とイエス・キリスト）が一つであるように、彼らも一つとなるように」とくりかえして祈つておられる。これは主イエスのひたすら願いで、あり、主のご生涯はこのことによつていたといつても過言ではあるまい。ヨハネによる福音書には「ゲツセマネの祈り」は記されていないが、18章をみると、このあとイ

ビリビー27、128には「一つ心になつて力をあわせて斗い、何事も敵対するものたちにろばいさせられない様子を…

エスは弟子たちをともなつて園にはいられ、間もなくユダを先頭にした兵卒や祭司長、パリサイ人の下役たちの手に捕えられている。ユダはイスラエルが回復され、統一される希望をイエスに托していた一人であつた。しかし彼の願うようなかたちや方法によつては実現されないことを知つたとき、イエスを裏切ることにためらいはなかつた。彼によればイエスこそ自分の願いや期待を裏切つたのだ。自分勝手な願いをいたぎ、それがかなえられないと相手をバ倒し、うらみを残して立去る、といつた人間の現実がそこにある。主イエスはそのような——つまり、憎しみや裏切りといった分裂した一人間の現実の中十字架にかけられた。しかし、私たちはそこにこそ、神のおどろくべき一致への熱情がひめられていることを知らねばならない。受難のことを英語で **Passion** という。それは「熱愛」「熱情」あるいは「渴望する」というような意味である。主の十字架に於ける **Passion**(受難)は神の **Passion** 即ち熱愛、人間に対するたちがたい思い、何とかして自身のうちに人をつなぎとめたいという渴望のあらわれなのである。

私たちの一一致は、そこからはじまる。パウロは「聖靈による一致を守り続けるように努めなさい」という。一致を造り出せ、とはいつていらない。私たちが求められていることは「さあ一致しよう」ということではなく、十字架のみわざによつて既にあらわされ、与えられている一致に気付いて、それを守り続けよということなのである。

一致は既に与えられている。それを守り続けるためにどうあるべきか、①召された召しにふさわしく歩け。召しとすることを私たちは十分にわきまえる必要があると思う。信仰は私たち自身の願望や決意以上のものである。人間のマネに於て主が示して下さつた態度をこそ学ぶべきである。②できる限り謙虚であること。言うべきこと、なすべきことをもちながら引きこんでいることではない。謙虚さとは何よりも神の前における態度でなければならない。神がれど心をもつことである。私心をもたず自己主張をしないといふことである。③柔軟であること。イエス・キリストは柔軟なかたであつた。しかしそれは生來的な氣だてのよさといふことではなく、積極的に人をやわらぐ意志の強さを意味する。ロバに乗つてエルサレムに入城される主の柔軟な姿のかけに十字架にむかつてのひたむきさを認めずにはおれないものである。④寛容を示せ。単にものわかりがよいということではなく、「主があなたがたを受入れて下さつた」ということではなく、「主があなたがたを受入れて下さつたように」相手を受入れることである。⑤愛をもつて互いに忍びあえ。ローマ5:2-5には忍耐ということが希望に現状が変革される希望である。そしてその希望をいたかし

めるものは愛である。⑤平和のきずなで結ばれよ。「キリストはわたくしたちの平和であつて……」（エヘン2・14）キリストが私たちを結ぶきずなである。教会の中でのことはあまりにもわかりきつたことである。しかし、にもかかわらず、一致を守ろうとする努力が何かほかのことによつてはかられようとすることがないだろうか。キリストに、そしてキリストを媒介として互いがつながつていふということを私たちは常にたしかめて行かねばならない。主はいわれた「私につながつていなさい」（ヨハネ15・4）そこにこそ、私たちの一一致が示されているのである。

（昭43年7月）

アモスの召命

アモス3・1～8

貴族であつたイザヤあるいは祭司の家の出であるエレミヤにくらべて、アモスはテコアという田舎の一牧羊者にすぎない。このような彼が予言者として召されたといふことに私はどのように人でも自身のみわざのために立て用いられる神の深いはからいを感じずにはおれない。

アモスの時代は一口に言つて、富國強兵の政策が一応の成功をおさめて、イスラエルの国力はとみに増大してゐた。物質的繁栄の時代が訪れていたのである。しかし今日の社会がそうであるように、物質的繁栄は必ずといってよいほど、精神の衰退を招かずにはおれない。外的なる生活への関心と追及は内的な面をおろそかにさせる。そして、そのような社会に共通した現象は不正と悪徳の大しようとする。富むものは貧しいものからかすめとり、強いものが弱いものをしめたげる不正義が、都会文化のきやびらかさの中で、良心のとがめすら感じられずに行われる。（2・6～8、5・10～12）外面がいかに美しくよそわれていても、それは既に深く病んだ社会であった。アモスはそのような社会に對して、「わざわいなるかな」と神のきびしい審判を語るのである（6・1）

れ、快樂によいしれる人びとにむかつて警鐘をならすた
めに、野人アモスをあえて選ばれたのである。

、

当時、予言者といふのは既に一般化した職業であつた。彼はつづみを打ち、琴を鳴らし、笛をふきならし、恍惚状態の中で神託を告げてあちこちをめぐり歩いた。（サムエル上10・5参照）、予言者の組合があつて、政治的にも大きな力をもつてはいたが、次第に軽べつ視されるようになつてはいた。それは予言をするのが衣食のためというようなものが増加してきただである。職業が生活の手段と化すとき、生命をかけるほど的情熱も、自らを治めるきびしさも、そこには見出すことができないし、人びとの尊敬を集めることはできない。予言者に限つたことではない。

アモスが予言者となつたのは、もちろん、衣食のためでも、名譽心や出世欲のためではなかつた。彼は自分が職業予言者ではないということを自覚していた。（7・14）彼はあくまで牧者であり、いちじく桑の木を作る者であつた。

そのアモスが予言者として立つたのは「主なる神が語られる。だれが予言しないでいられよう」（3・8）と言つているように、神の強い召しという以外にはいかな理由も見出せない。神はそれこそ圧倒的な力をもつて彼にのぞまれたのである。アモスはそのまま応ぜずには

おれなかつた。無学であるとか、仕事が忙しいとか、アモスがもし自分自身をみつめるならば、そのような拒否の理由はいくらでも見出せたに違ひない。しかしそのようないことを考え、ためらう余裕など彼には全くなかったのである。主が語られるとき、彼は予言せずにはおれなかつた。浅野教授が指摘しているように、予言者の行動は神の力が彼の心靈にふれて発する反射運動ともいへきものであつた。

しかし、それはもちろん、動物におけるそのように生理的な反射運動ではない。身分も力もないものを見出し、あえて重大なつとめを与えて下さる神の知遇に対する感激の応答であつたというべきであろう。

エリコの取税人のかしらであつたザアカイは、イエスが彼の家に客となつて下さつたとき、知られていたといふことの感激とよろこびをかみしめながら、みずからすんで貧民への財産の分与とあやまちのつぐないを申し出た。（ルカ19・1～10）そうせずにはおれなかつたのである。パウロはダマスコ途上で、キリストにとられた。神に敵対するものを、なおかえりみ、異邦人への伝道のつとめを命じておられる、ということを知つたとき、彼は「直ちに、血肉に相談もせず」準備のためにアラビヤに出て行つたのである。（ガラテヤ1・13）

17) 召命の自覚は同時に神の予知に対する感激である。

「母の胎内にあるときから」神は実は彼を知つておられたのだ。彼がそれと知らず、「激しく神の教会を迫害し、また荒しまわつていた」ときも、神の恩恵と召しとは変えられることがなかつたのである。（ローマ11・29参照）主を否んだペテロの前に姿を現わして、主は言わされた。

「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」（ヨハネ21・15）そしてさらには「わたしの子羊を養いなさい」と言われたのだから。裏切つたものも決して見捨てずに、探し、見出し、歩むべき道を示し給う主の愛を知らねばならない。神の知遇とは、単に私を生れる前から知つておられるとか、私の状態を知りつくしておられるということにとどまるものではない。無力なもの、不義を働くもの、失敗をたえずくりかえしていくもの、本当にみじめなものであるにもかかわらず、その私をかけがえのないものとして、心にとめ、神の顔をさけようとする私を訪ね、引き出し、ご自身のわざにあすからせようとせずにはおれない神の愛の働きである。そればかりではない。「主はわたしたちのために生命を捨てて下さつた」（ヨハネ3・16）のである。「よい羊飼は自分の羊を知つてゐる」そして「羊のために命を捨てる」「わたしはよい羊飼である」（ヨハネ11・15参照）と主は言われた。この愛に目覚まされたとき、バウロは「福音を宣べ伝えられないなら、わたしはわざわいだ」（コリント9・16）と語らずには

おれなかつたのである。

「主なる神が語られる。だれが予言しないでいられよう」と言うアモスの感動を学びたい。内がわからふるい立たされずにはおれない神の知遇の感激をもつと深くしたいと思う。

神に知られてゐるということは野にあるものを立たせずにはおれない光榮であり、感激である。しかし、それは同時に大きな責任でもあることを忘れてはならない。拒むことはできないし、どこまでもそれを拒み、責任をかえりみない者に対する審判の声に耳をふさぐことはできないのである。

イスラエルに対し神は「地のもうものやからのうちで、わたしはただ、あなたがたを知つた」（3・2）と言われる。知るとは、親が子を知り、親と子が一つであるよう強い結合をあらわすことばである。しかし、イスラエルはいわゆる「親の心、子知らず」で神のみ旨に生きようともせず、神の正義をゆがめてかえりみず、選民の誇りをみずから放棄したのであつた。「それゆえ、わたしはあなたがたのもろもろの罪のために、あなたがたを罰する」と言われる。しかし、それは神がイスラエルを「知つた」からである。イスラエルをかけがえのないものとしてかえりみられておられるので、その罪を黙視することができないのである。神のイスラエルに対する

る愛ゆえの苦悩が「それゆえ：あなたがたを罰する」ということばにあらわされている。

その神の審判は、ひとり子イエス・キリストの十字架においてあらわされたのであつた。アモスは、背信のイスラエルに対して、神の審判を語りつつ、「公道を水のように、正義をつきない川のように流れさせよ」（5・24）と訴えた。私たちにとつて、そのことは「十字架の主を仰ぎ、従え」ということである。そこにこそ、神の深いかえりみに、こたえることのできる、いや、こたえずにはおれないただ一つの道があるのだ。（昭43年9月）

仕えるべきもの

列王記上 18・17-21

繁栄を望まないものはない。しかし、たとえばイスラエルの歴史をたどつてみてもあきらかなように繁栄の時代は、不信仰と不道徳にみちた時代であつた。そして坂道をのぼりきつた車が、こんどは加速度的にかけおりて行くように、繁栄のきわみに達したとき、それは衰微と

崩壊のはじまりであつた。イスラエルは何回か同じことをくりかえし、逐に紀元前五八七年バビロニヤによつて滅され国としての歴史を閉じることになる。

繁栄そのものが悪いというのではない。本当に祝福された繁栄というものもある筈だ。それでもかかわらず、繁栄によって道をあやまり、破滅へとむかわざにおれないのは何故か。繁栄の基いが問題ではないかと思う。

予言者エリヤが活動したのは約二九〇〇年前であるが、その頃イスラエルはアハブのもとで、榮華をうたわれたソロモン王朝にまさるとも劣らない繁栄ぶりを示しつつあつた。ソロモンの死後、イスラエルは南北両朝に分裂し、それぞれはげしく敵対しあうばかりか、内側でも政変があい続き、北王国では四〇年間に王朝が四回もかわり、第三王朝のバアシャ家を滅して王位についた第三王朝のジムリなどはわずか七日間で部下のオムリに殺されるという状態であった。オムリの時代になつてようやく政情は安定のきさしを示し、國力も次第に回復はじめた。オムリの子がアハブである。アハブは当時イスラエルの北辺をうかがつていた強国ダマスコに対し、フェニキヤと同盟を結んで守りを固めたが、それは軍事上の見地からだけでなく経済的な面での利益をはかつてのことであつた。フェニキヤは北中海西岸に位置する地の利を得て國際貿易に多大の収益をあげていたし、先進工業国

としても知られていたのである。アハブはフェニキヤの王女イゼベルを妻に迎えることによつて國益の増大をはかつたのである。イスラエルに繁栄をもたらし、國力を充実させたといふことからいえば彼はイスラエル史上、まれにみる名君であつたといふべきであろう。國民は彼の政策をよろこび、支持した。しかし、その中にあつてひとり予言者エリヤだけは深いうれいをもつて見つめていたのである。

○
イスラエルに繁栄を招くきつかけとなつたイゼベルとの結婚は同時にフェニキヤのバール礼拝を輸入する結果を生んだ。イゼベルの被護のもとにバール信仰は次第に拡まつて行つた。フェニキヤとの同盟によつて生活が豊かになつたとすれば、フェニキヤから入つてきたバール信仰に好意的であるとするのは人情かもしない。イスラエルはモーセの十戒を通して「イスラエルの神ヤーウエの外に何ものも神とはならない。いかなるものをも像にきみ、拝んではならない。」ときびしくいましめられていた。神ヤーウエに対する信仰と服従のみがイスラエルの眞の繁栄を約束するはずであつた。しかし、物質的に豊かでありさえすれば、それがどこからもたらされようがいつこうにかまわない。例であつても要するに金持ちになつて生活が樂になるならば頭をさげる。こういう風潮は今日も少しもかわらない人間の現実では

ないか。經濟問題、政治問題が常に信仰の事柄より優位を占める。ひがみから言うのではない。そのようなところに大きな落しわながあることに國も、個人ももつと気付かねばならないと思うのだ。

アハブは政治的にはすぐれた王であつたかもしれないが、信仰については暗愚であつた。だからこそ、熱心なバアル信仰の奉持者であるイゼベルを妻に迎え、バアル礼拝のための礼拝所を彼女のためにフェニキヤから大工を招いて建立したりしているのである。しかし、このようないアハブは次第に專制的な看主として國民を圧迫するようになる。列王記上二一章に記されているナボテのぶどう園の事件は一例である。イスラエルでは王が專制的にふるまうことは考へられないことであつた。イスラエルの眞の支配者、統治者は王ではなく神ヤーウエである。王といえども神の前では悔改めを必要とする罪人である。バテンバをウリヤからうばつたダビテは予言者ナタンの非難に対して「私は主に罪を犯しました」と告白している。(サムエル下12・13)しかしイゼベルにはそのような良心の苛責も、罪の意識もなかつた。彼女にとつて、王は絶対者であり、ほいままにふるまうことができるはずであつた。ヤーウエ信仰について深くかえりみることのないアハブがそうちしたイゼベルにそそのかされて、専制君主として國民にのぞむよくなつたのは当然のなりゆきかも知れない。神の様な権力を身につける誘惑に

人間はたえずさらされている。眞の神を知り、その前にひさまずく謙虚さを人は学ばなければならない。バアル信仰は権力を望む誘惑に対し無力であるばかりか、むしろそれを肯定し、助長するのである。だから人間にとつてはきわめて好都合である。バアル礼拝はこうして拡がつて行つた。しかし、人間の欲望が律せられることもなく、助長されるところにどうして本当の正義が守られるだろうか。

○
このようなイスラエルの状態をエリヤは黙視できなかつた。社会の不義不正は、正しい信仰が守られず、バアル礼拝に人びとの信仰的良心がまひしているからだ。イスラエルを救う道はイスラエルの神ヤーウエに対する純正な信仰を回復する以外にない。この確信に従つて立上つたエリヤに対して、イスラエルに繁栄をもたらしたことを自負するアハブははげしく憤つた。エリヤの態度は、いたずらに人心をまどわせ、國家の治安を乱す不逞の行為と考えられたのである。「イスラエルを悩むものよ。あなたはここにいるのですか」しかし、イスラエルを本当に悩ましているものはだれか。国民の多くは繁栄によいられて、悩みなどまるで知らないように見える。しかしそのこと自体が実は悩みの深さを物語つているのだ。屋をあざむく様なシャンデリヤやネオンの光に夜の深さを知らずにうごめく人びとの世界は悪徳の巣くつであ

る。政治の腐敗も国民生活の道徳的頽廃も結局は夜の世界のあでやかさに幻惑されている結果ではないだろうか。

それにもかかわらず、多くの人びとはそのような夜の世界のひろがりを繁栄のしととして歓迎している。そこでは眞の神信仰ということはきわめて不人気である。あるいは正義の主張も、ただいたずらな秩序の破かい者として非難をあびせて葬り去ろうとする。私はたとえば全学連などの暴力を決して是認するものではないが、彼らの訴えにはもつと耳をかさねばならないと思う。彼らには繁栄のかけにひそむいよいのない社会の矛盾と不安、そしてそれを生み出しているものに対するはげしい怒りがある。彼らにも誤りはある。しかし、この社会を本当に悩ましているのはだれなのか。

○
エリヤは王に答えて言つた。「わたしがイスラエルを悩ますではありません。あなたとあなたの父の家が悩ますのです。あなたが主の命令を捨てて、バアルに従つたからです」。
それはちようど、眞実な子であればこそきびしく訓練する父のいましめを放棄して、甘言をもつていざなうもいして、悩みなどまるで知らないように見える。しかしそのこと自体が実は悩みの深さを物語つているのだ。バアルに走つたのであつた。

エリヤは人びとに言つた「あなたがたはいつまで二つの間に迷つてゐるのですか。主が神ならばそれに従いなさい。しかし、バアルが神ならばそれに従いなさい」

口ではイスラエルの神の名をとなえながらその生活はバアルに近付き、自分の欲望に従つて歩み、主のいましめをないがしろにする。あるいはまた、ヤーウエに対する祭儀は守りながら、自分の利益のためにはバアルにひざをかがめることに矛盾も心のうずきも感じない。そのような偽瞞に対してエリヤはするどく迫るのである。人を本当に生かすものはヤーウエかバアルか。私たちは何によつて生きているのか。繁栄が私たちを生かしているのか。

「あなたがたの仕える者を、きよう、選びなさい」(ヨシニア24・15)私たちの仕えるものによつて私たちの生活は決められる。バアルに仕えることによつて、繁栄の泥沼の中に深く沈むか、神ヤーウエに仕えることによつて、本当の祝福とやらぎに導かれるか。二つに一つである。二人の主に兼ね仕えることはできない。今こそ決断のときである。

(昭和43年10月)

羊飼たちの讃美

ルカ2・8-20

私たちの眼を遠く二千年前のユダヤのベツレヘムにむけてみよう。主イエスがお生れになつたのはエルサレムからへだたつた片田舎であつた。しかも、銅葉おけがその寝床だつた。その幼な子を囲んでいるのはヨセフとマリヤ、それと数人の羊飼たちにすぎなかつた。今日、はなやかに迎え、祝われるクリスマスにくらべて、それは何というひそやかな、貧しい光景であろうか。ジングルベルの鐘の音も、パイプオルガンの莊重なひびきもそこにはきこえてこない。羊飼たちは貧しく無力な人たちであつた。しかし彼らは天使の告知に急いで出かけて行つて救主を拝み、神をたたえ讃しながら帰つて行つた。立派なクリスマスのかざりつけがなくとも、素晴らしいご馳走が並んでいなくても、そこには表現できないほどのよろこびと感動があつた。クリスマスに私たちが学ぶべきことはこのことではないだろうか。

まず、それが夜の出来事であつたということに注目しよう。何故、それは夜に起つたのだろうか。キリストがお生れになつた当時のユダヤの状況が、まさしく夜を思わせるものであつたといわねばならない。紀元前五八七年

年、イスラエルはバビロニヤの手で滅されるのであるが、國を失い、敵の侵略をゆるすということがどんなに大きな悲劇か、それは、単に口惜しいというようなことでは決してすむものではないのである。エルサレムの神殿は

のちにエズラ、ネヘミヤ等によつて再興されるが、バビロンがペルシヤに倒され、ペルシヤがギリシャにかわり、さらにローマが霸權を握つてもイスラエルの被占領國としての立場はかわりようがなかつたし、そのような中でのさまざまの独立戦争や一撃のよな動きは、いずれも失敗して人びとの生活はますます疲弊の色をこくするばかりであつた。希望のない状況の中で人びとはしばしば衝動的な犯罪をしてかす。そして、そのようなことが絶望的な状況をさらに深めて行くのだ。それはまさに暗黒の支配する世界であつた。

しかし、「光はやみに輝く」のである。やみが深ければ深いだけ、光は明るく輝く。あるいはまた、夜がその暗さを増すとき、それは夜明けの近づいているしだといわれる。

羊飼たちは、夜、ねずの番をして羊たちを見守つていた。彼らは夜のくらさを身にしみて味つていた。荒野の夜は都會のそれよりも深い。多くの人びとがくらさを忘れて酒色に溺れ、歡樂に興じ、あるいは深いねむりにおち入つているとき、彼らは覚めた目で、ひたすら夜の明けそめる時を待ちわびていたのであつた。その羊飼たち

に、天使は救主の降誕を告げしらせたのであつた。
私たちも、私たちの現実を、こまかさずに直視することを学びたいと思う。

○

天使は羊飼たちに「恐れるな」と語つた。聖書は実際に多く「恐れるな」と呼びかけている。(ルカ1・30、5 10、マタイ14、27、28、5等)それは私たちの生活がいかに多くの恐れに囲まれているかという証拠でもあろう。たとえば、私たちには貧しさのおそれがある。暮が近付くとともに、賑やかな歳末風景をよそに、親子心中や捨子などの痛ましい記事が目をひく。貧しさに耐えられないのだ。三億円強奪事件なども、そのそこには貧しさ故のおそれから解放されたいという気持がひそんでいないだろうか。また、無力であることとのおそれがある。それからのがれるために國に於ても個人に於てもいかにはげしくしのぎをかけずつて力を得ようとしていることか。数をたむことしかできない人間は、本来無力な存在なのである。さらに、孤独のおそれがある。イギリスで老人ホームに収容されている婦人が自殺した。日記に「今日もだれも声をかけてくれなかつた」と記されていたといふ。人にわざと迷惑をかけたり、人の悪口をいつたり、噂ばなしに興ずるのは本当は孤独だからではないか。人いわれることに何故こだわつたり、不気嫌になるのか。

傷口にさわられることをひそかにおそれているのではな
いか。この様に考えると多くのおそれがあることに気づ
くのだが、日頃、人びとは余りそのようなことを問題に
しようとしてない。しかし、ルカが記しているように「主
の榮光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた」
のであつた。主の光にてらされたとき、はじめて私たち
の現実があかるみにさらされる。しかし、おそれてみち

た現実に気付いたとき、私たちもそこで「恐れるな」と
いう呼びかけをきくことができる。おそれや不
安を感じないでいる人には「恐れるな」ということばも、
それに引き続いだ告げられている救主のご降誕のことも
人ごとでしかあるまい。しかし、本当におそれの中に在
る人にとつて、それはまさに大きなよろこびのおそれな
のである。

それ故、私たちも、私たちのおそれてみちた現実が主
の光によつてさしてらされることを願わねばならない。

○
天使から救主の降誕を告げしらされたとき、羊飼たち
は「さあ、ヘツレヘムに行つて、主がおしらせ下さつた
その出来事を見てこようではないか」と互いに語りあつ
て、急いで出かけていった。この羊飼たちの態度を学び
たいと思う。夜の明けるのを待つてとか、もう少し連れ
ができる、あるいは身じたくをとのえて、というよう
な悠長な態度ではなかつた。夜道もかまわず、羊のむれ

も野において直ちに出かけたのである。それは彼らが心
から救主の出現を待ち望んでいたからであり、彼らが本
当に貧しく、それだけを望みとしていたからであろう。
議論をして納得できたらとか、身じたくがでけてなどと
いつてゐる限り、救主にはお逢い出来ない。信するとは
羊飼たちのような態度をいうのである。

○

彼らは幼子イエスに逢つた。そして何よりも自分たち
に語られたとおりであつたので、神をあがめ、さんびし
ながら帰つていつた。信する心が救主を見出す。そして
新しい生活がそこからはじまる。羊飼たちの生活に表面
的には大きな変化はみられない、彼らは急に金持になつ
たり、出世したわけではない。依然として彼らは貧しい
羊飼であり、依然として夜はくらかつたであろう。しか
し外側の状態は問題ないのだ。彼らの内側に於て起つた
変化に私たちも気付かねばならない。「おそれはかわり
て、いのりとなり、なげきはかわりてうとなりぬ」と
讃美歌（新生さんび14）にある通りの生活がそこにはじ
まつてゐるのだ。彼らを支配しているものは、もはや夜
のくらさでもなければ、おそれでもない。よろこびであ
り、感謝であり、さんびであつた。

人間の幸福を多くの人びとは財産や地位、名誉、権力
に求める。しかし多くの富を持ちながら悲しみにとざさ
れている。高い地位を得ながらおそれや不安にかられて

いる人も決して少くない。それに対して、最初のクリスマスの物語は、何はなくても、よろこびにみたされたことができた少數の人たちのことを私たちに語っているのだ。そして人生を豊かにし、社会を変革して行く力は、

そのようなよろこびの中にこそあるのである。

(昭和43年12月)

しつような祈り

ルカ 11・5-13

5-8節は根気強い、執拗な祈りの力について教えられた主イエスの譬である。主は熱心に祈ることを教えて下さった。天の父は祈りにこたえて下さるかたである。心の中の要求をいつぱいかかえこみながら、かたくなに口をつむんで背をむける子の姿をみつめることほど親にとつてならないものはない。孤独な心を思うからである。孤独は独善を生み、独善は不信感をつのらせる。私たちは祈ることを知らない社会がいかに多くの独善と不信にみたされているかを考えねばならない。その中で、私たちも祈ることを忘

れようとしてはいないか。祈りの切実さを失いはじめてはないか。教会の無力が取沙汰されるとき、私たちはそのことを真剣に反省しなければならないと思う。



この譬は真夜中の出来事として語られている。(5節)

それは、私たちをとり囲んでいる現実を暗示するものではないか。さまざまな不安と深い絶望がたたよつている。暗やみにひとり耐えることのできない人間は、あかりにむらがる虫のようだ。人工の光を求めてあちこちとさまよい歩く。最近も、教会のすぐ近くにまたもやナイトクラブが生れた。それだけ人が集まるからであろう。しかし、そのことは今日のくらさを物語っているのだ。暗黒にとざされた中で、ある人たちは自分の穴の中にとじこもうとする。

中学生の頃、真夜中にふと目がさめてこわくなり、ふとんの中にもぐりこんだ経験を思い出すが、かたく戸をとざしてしまつて、もはや他人のことへの正しい関心を抱くことも、連帶して生きることもできない生活がそこにみられる。マイホーム、マイカーという時代は、だから繁栄ではなく、深い孤独をやみを物語る時代なのだ。

このような社会の現実の只中で、私たちはまず自分の無力をさということを本当に知らねばならない。友が旅先から着いたとき、自分のうちに友をもてなす何のよいものも残つてはいなかつた。いつたい、この最後中を思わせる時

代に、私たちは何をもつて友の疲れをいやし、その飢えを助けることができるのだろうか。友を助けることができる何かの力を自己自身のうちに持つていいのだろうか。私たちを熱心な祈りにむかわせるものは自分自身の無力さの自覚である。「友だちが旅先からわたしのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから」私たちももつと自分の無力さに気付くべきではないか、自らの貧しさの故に切に求めずにはおれない、その貧しさを知るべきではないか。

○

「パンを貸して下さい」という願いは拒絶される。(7節)身のための願いというより、むしろ友のあるいは娘のため祈りはきかれるということを安易に考へてはならない。聖書はむしろきかれない祈りの実例を語つてゐる。たとえば、や娘に対する愛が自分自身のこと以上に切実な氣持で求めのカナンの女に対するイエスのこたえもその一つである。させている。自分のことであればあるいは我慢したかもし娘から惡靈を追い出して下さいと叫びつづける女に対しても、れない。しかし友に不自由な思いをさせたくない、娘の苦イエスのこたえは実にひややかにきこえた。「わたしはイスラエルの家の失われた羊以外の者にはつかわされていない」一度ならず二度もイエスは女の願いを拒絶された。

「子供たちのパンを取つて小犬に投げてやるのは、よろしくない」(マタイ15・21 / 28)しかし、再三の拒絶によってもめげず女は願いつづけた。そして、その熱心さは「女よりも立会うことは自分が手術されるよりつらいことだつた。痛みが少くてすむようとに心から祈つた。それが親というものであろう。一人の友のためにも、そのような思いで祈りたいものである。拒絶されても決してへこたれない。あなたの信仰は見あげたものである」というイエスの賞讃のことばとともに娘の病をいやしたのだつた。拒絶には拒

るに学びたいと思う。そのような祈りの中で「しきりに願

絶する側でのもつともな理由がある。あの友人の場合にも「子供たちもわたしと一緒に床にはいつているので」ということわりの言い分があつた。私たちの願いに対して神の側にどのような理由があるか、それは私たちにはわからない。

しかし、だからといつて簡単にひきさがつたり、或いはうらみを残して立去つたりするのではなく、「主よ、お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」といわせる謙虚な、しかも執拗な願いを学びたいと思う。

うので起きあがつて必要なものをしてくれるであろう「いわれるよう」に、やはり祈りはきかれるのだということをあかししようではないか。

そこにこそ、真夜中のような状況を変革する力がみられるのである。(昭43年11月)

最後に13節に注目しよう。主は「天の父はなおさら、求めて来る者に聖靈を下さらないことがあろうか」といわれた。「なおさら」とは二様に理解できる。即ち、人間の父親以上にということと、人があれこれ求めるものにまさつて、ということである。切実に求めるものに対し、神は真実をもつて、しかも思ひにまさる恵みをもつてこたえて下さるのである。

私たちには力がほしいと思う。知恵が増すようにと祈る。仲間をふやして下さいと求める。しかし、私たちの働きの成果があがらないのは、私たちの力や知恵が、あるいは仲間が不足しているからなのか、それらのものが加わりさえすれば、何か今までより素晴らしいことができるというのか。主イエスは「聖靈があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて……わたしの証人となるであらう」(使徒行伝1・8)といわれたのである。どんなに私たちが力をもち、知恵にみち、多くの仲間をもつていたとしても聖靈の働きなしには、私たちは何事をもなし得ない。聖靈の助けなしに、一人の友の飢えをもいやすことは決してできないのだ。それ故、友の窮乏に気づくとき、私たちは何ものにもまつて、聖靈を与え給えと祈るものでありたい。

ヨナのしるし

(マタイ16・1-4)

「パリサイ人たちの「天からのしるしを見せてもらいたい。」という要求に対しても、イエスさまは「邪悪で不義な時代は、しるしを求める。しかし、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられないだろう。」と答えた。

パリサイ人らはイエス様に教い主らしい力を見せてほしい、納得できれば救主として信じよう、という態度だったのだ。イエス様に対してだけでなく、このような態度は私達のまわりにも多くみられる。しばしば私達は「友情のしるし」「愛のしるし」を期待し要求する。そして、そのしるし——自分が期待し考へているようなかたちでのしるし——が得られない場合、あのパリサイ人らがそうであつたように、失望と非難を残して彼のもとを立ち去つて行く。

イエスさまは「ヨナのしるしのほかには」と言われた。それはいうまでもなく十字架と復活をさすものだが、人々の期待に対しても余りにも想像を越えた、それ故に多くの人々にとつてはつまづきとなつた出来事であつた。しかし、そこにこそイエス様の救主——私達を罪からあがない出して下さる救主としての唯一つのしるしがある、といわれるのだ。私達は信仰によってそのしるしを認めることができる。だから人々にとつてつまづきで

しかない十字架と復活に神の深い恵みとあわれみを覚え、心からの感謝と讃美をささげることができるので。換言すれば、信仰の目はみにくく十字架の内側に神の御子の姿を認めさせ、十字架のもとに私達をひれ伏させずにはおれないものである。私達は信仰の目を与えていただこうと願つてゐるのではないか。外見の、自分で想像し期待したかたちではなく、内側の姿を何事につけ認め受け入れていくことを学びたいと思う。

2

私はペテロがイエス様を否認した後「主はありむいてペテロを見つめられた。」(ルカ22・61)と記されていることばにひかれる。そのイエス様のまなざしは何を語つてゐるのだろうか。「お前はやつぱりつまらない人間だ。」というような白い目をつたか。イエス様を否認したペテロの姿は自分の保身の為には愛するものすら裏切らざるを得ない人間のみにくさと弱さを露呈していく。しかし、イエス様はそのペテロの内側を知つておられた。みにくさや弱さのかげにひそむ人間としてのものだえ、裏切りながら否認しながらも「イエス様、でも愛しているのです。」といふかすかな声を聞いて下さるのだ。いや、たとえそのような声が聞こえなくてもイエス様は受入れて下さる。それはペテロが愛したからではなく、イエス様がペテロを愛しておられるからだ。イエス様の

まなざしを持つことを心から願おうではないか。

(昭和42年「かんらんの新葉」・19号)

「富める青年」の物語より

(マルコ10・17と22)

1
「よき師よ、永遠の生命を受けるために何をしたらよい
でしようか。」

イエス様の前にかけより、ひざまずいてたずねた青年の姿は、その間にかたの誤りがイエス様から指摘されたにもかかわらず、いかにも青年らしく真剣であり、卒直であつて好ましい。彼はその富や才能や正しい生活によつても満たされないものを感じていた。だからこそ「永遠の生命」という究極的なものをたずねずにはおれないのだ。富や才能や正しさというものが生活にある種の豊かさを与えるであろうということを私は否定はしない。そして二十世紀の文明はそのようなところに成功しているといえるかもしれない。しかし究極的なものが問われずにどうして生きとした喜びにつつまれた苦みがあり得るだろうか。

「使命」に生きるといふようなことが最近めつきりきかなくなつた。使命感に頬をもやし「つとめ」を天職として死守したのは昔のことなのか。現代ではそのようなことは古びた外とうにすぎないのでどうか。ある人が指摘したように「いのち」のないところでは「いのちを使う」即ち、使命といふことなど起きようがないのである。

私達はいのちを惜しげもなく使うことができるようになります「いのち」そのものをひたむきに求めようではないか。真摯にたずねようではないか。

2
青年がイエス様の前にかけよりひざまずいた様にもつと聖書にかけよつて行こうではないか。真剣な問いを聖書に向つて問い合わせようではないか。

青年の問いに対し、イエス様は「神ひとりのほかによいものはない」といわれた。「よき師よ」という呼びかけには、十分な尊敬の念があらわされてはいるが、なお「何をしたら」という行動の選択権は青年の側にある。そこではイエス様のこたえが青年を納得させるかどうか。つまり、イエス様のこたえはデパートにならんでいる商品とかわりないことになる。もしそれが青年にとって価値あるものと判断されれば、大金を投じても手に入れるであろうし、値段とひきあわなければ、あきらめるに違いないのだ。青年はやがてイエス様の前から立ち去つて行く。いかに多くの人がこの青年と同じことをくりかえしていくことか。私が

ちの価値判断が主であるかぎり、いくらはげしく求めてもそれは徒労に終るであろう。みことばへの聽従を私たちには学びたい。「おことばですから」というベテロの態度（ルカ5・5）に学ぼうではないか。

3

イエス様は端的に「従え」と命じたもう。頭だけの服従や感情だけのものではなく、全人格的な服従を求めたもう。服従の第一歩は、古い生活とのけつ別である。自分のものといえる最後のものまでできこうではないか。裸になつてイエス様に従うことを行はじめようではないか。打算にみちた、小市民的な安易な幸福でよしとする時代の中でイエス様は「われに従へ」と招き続けておられるのである。（昭和41年「かんらんの新葉」18号）

しかし、11・1の「パンを水に投げよ」ということばにいつたいどのようを知恵がかくされているのだろうか。パンは人間のいのちを保つ。パンなしに人は生きることできない。大切なものである。それを水に投げよとは捨ててしまえということと同じではないだろうか。パンに執着することを止めよといつてゐるのだろうか。しかし、投げよということとは明らかに意図的のことであつて、単に捨てたり、あきらめたりすることではないようである。「多くの日ののち、あなたはそれを得る」といふことばかりも明らかであろう。しかし、パンを投げたら、それを再び手に入れることができるだろうか。種を地にまけば生えよう。しかしパンを水に投げて、多くの日のうちにそれを得るなど、それは全く知恵に反したことではないだろうか。

あなたのパンを水に投げよ

伝道の書11・1

パンとは何か。私たちの生命そのものと考へることができる。あるいは生命のいとなみ、労働や勉強と考へてもよい。私たちの生命を、労働を、勉強を水の上に投げよ、といふのである。水とは、水の流れ（イザヤ32・2）と考えてよいだろう。

伝道の書は箴言とともに知恵の書として知られている。人生の深い味わいを教えてくれるところで、きわめて具体的な生活の知恵を学ぶことができるるのである。

かつ以前、私は横山大観の絵の展覧会を行つたことがある。絵心に乏しい私だが「生々流転」という大きな絵の前からしばらく立去れなかつた。川の流れを描いたもので、山に湧いた水が山肌を流れ、渓谷をわた

り、小川から大きな川に姿をかえて海に注ぐ大作である。その絵が教えるのは、人の世の移りかわりということであろうか。世の流れは一刻たりともとどまらず姿をかえて行く。仏教的な感覚からいえば、そこに描き出されているものは「むなしさ」ということなのであろうか。私たちにはそのようなむなしさには耐えられない。勉強も労働も、いわばそのむなしさからのがれるためであつて、そのためには勉強したこと、労働をしたことが十分に引きあうものでなければならない。人間の知恵はそのようになるのである。

従つて、パンを水に投げるといふことは全くおろかしいこととして拒否されてしまうのである。かしこい人は、もつと引きあうことを考えるものである。

先日の新聞に「教育費を考える」という題で都市の教育費乏ということがとりあげられていた。子供の塾とかテスト代のために出費がかさみ、そのためにはパートタイムでアルバイトをしている主婦が少くないといふ。しかし、その母親たちは、自分たちは子供の教育のためにこれまでにしているのだといふ自負をもつて、胸をはりながらこう言うのだそうだ。「国立大学や公立高校の一流は経済的に安くあがるうえにレントル価値が大きい。だからそれまでに塾だテストだと教育投資をして引きあうのだ」ここでは母親の労働や出資は一つの投資として考えられている。その子が一流大学や高校に進めば投

資に成功したといふことになろう。このような母親を世間では教育ママと呼び、かしこい人（本当にかしこいとはいえないのだが）と考えがちである。しかしその記事でも指摘しているように「この計算の薄っぺらなこと。つまりいいレツチルがもらえる」という仮定に立つて、現在の家庭の負担過重も辞さないという生活感覚のすれ、親と子の間の精神的な損失が計算されない平坦な合理主義がはびこっている」ことを私たちを考えなければならない。引きあうことを考える人が果して本当にかしこい人なのだろうか。

重症心身障害児の施設である島田養育園ではペットが余つて人手が足りないといふ。看護婦の全国的な不足もたたつてゐるが、何といつても看病のしがいがないほどの人々の面倒を見るといふことは大変なことである。そのようなところで働いている医者や看護婦たちは、それこそ、パンを水の上に投げているような人たちではないか。そして、そのような人が絶対に必要なのだ。

それは全くの徒労の様に見える。しかし、聖書は「多くの日ののちそれを得る」と教えている。私たちはここで、人の目には全くの徒労と思えることがらが、神には決してそうではないといふことを学ばねばならないのである。パウロは、わたしは植え、アボロは水を注いだ。しかし育てて下さるのは神である、と語つてゐる（一コリ

ント3・6) また主イエスは神の國のたとえの中で「地

はおのづから実を結ばせる」と語つておられるが(マルコ4・26-29) 私たちは神がすべてを支配し、すべてのわざをすすめておられるかただということを忘れてはならない。私たちの生活は決して自分の投資によつて、つまり自分の力や知恵を注ぐことによつて成立つてゐるものではなく、神のあわれみと恵みによつて支えられているといふことを忘れてはならないのである。私たちのわざを生かして用いてくださるのは神なのだ。この神への信頼に生きるとき、私たちは、あえて徒労と思えるようなことにもよろこんでたずさわることができるのである。

伝道というと、このテキストに従つて考えてみた
いと思う。「みことばをのべ伝えなさい」と端的に命じ
られている。みことばとは生命のパンである。それを水
の上に投げよ、というのだ。流れ行くものにみことばを
投げかけて行く。それは時として實にむなしい気持にさせられるものである。人は流れ来り、流れ去る。水はこ
とばをむなしく呑みこんで流れ行くのだ。

伝道の書の記者も、「いくたび神のことばを語つて失望を味つたことであろう。しかし、それにもかかわらず彼は

なおあえて投げ続けることをすすめているのだ。

主イエスはご自分のことを天から降つて来たパンといわれたが、私たちは神ご自身がこの人間の歴史の中に、イエス・キリストを投げこまれたことを考えたい。パンが水の中に沈んでしまうように、イエス・キリストは人の世の流れの中にご自分の姿を没し去られたようにみえたのであつた。完全に没してしまわれたのであつた。しかし、それは徒労であつたか。多くの日ののち、歴史の中にイエス・キリストのいのちが多くの実を結んでいることを私たちは知つてゐる。

伝道のわざは時にはむなしくみえる。しかし目前の成績によらず、神のなし給うところを信じて、みことばをのべ伝えようではないか。神は信頼に生きるが故に、あえて徒労にかける働き人を求めておられるし、決してそのわざをむなしくはされないのである。

(昭42年9月)

民主主義といふことについて

1

戦後の民主主義は虚妄か、という論議がよく聞かれる。二十年前の八月十五日、終戦をさかいに封建的な全体主義国家体制がくずれ去り、民主主義社会が出現したわけだが、それは、外から与えられたもので内側からのものではなかつた。いわば、胎動と陣痛を伴う出産ではなく、開腹出術によつて取り出された虚弱児にも似たもので、戦後二十年、果して、順調に育つことができたか、というわけであろう。たしかに先頃行なわれた参議院議員選挙一つをとりあげても、日本の民主主義の虚弱性といふより、むしろ虚偽性といふものを痛感せざるを得ないし、政治に經濟に逆コースの傾向は、今日おおべくもない。

2

教会などの役員選挙に自分から進んで立候補する人は余り見かけられない。ところが一方では、国や地方の議員になるために、手段を選ばない人たちが少なくない。この相反する現象をどのように考えるべきか、役につくことをより大きな権力をもつことと考へ、前者はそれを固辞して後者は何としてでもそれを手中に治めようとするといふ、前者を少しほめすぎ

ることになるかも知れない。役につくことはむしろ、仕えることである。とすれば、仕えることを遠慮することが果して謙遜か。仕えるということを忘れた権利の主張や利欲の追及が民主主義を名ばかりのものにしているのだ。そこには仕えられることをしか望み得ない小兒的な感覚が働いている。

3

広島、長崎に原爆が投下されて二十年、いまだにこつ然と白血病で死んで行く人がいるといわれる。この大きな傷あとを私たちは忘れるることはできない。いや、どんなに平和のヴェールに包まれ、焼あとが美しい花に飾られたとしても、決して忘れてはならないものだ。それは、単に戦争の悲惨を忘れないためにというだけではない。人間の罪の恐しさを私達はかみしめねばならぬ。戦争といふ異常な状況の中ではいえ、平然と殺りきがくり返されるのは広島、長崎に限つたことではない。

戦後中国から引き揚げた人が、廃墟の広島に立すんだ時、怒濤の様に南京に押し寄せた日本軍が、城内の女子供を片端からまるで人形のように、切り殺し、射殺して行つた、いわゆる、南京大虐殺のことを思い出すにはおれなかつたといふ記事を先頃ある雑誌で読んだ。

家庭ではよき父、よき夫である人たちが、集団の中

で人格を喪失した殺人器に化してしまった。恐しいことだ。

戦争に限らない。謙譲を美德と心得、身の回りを清潔にする人が、何故満員電車の中にわれ先にと列を破つてわりこんだり、あたりかまわざごみをちらかすのだろう。柔軟で物わかりの良い人が、何故デモや団体交渉でなぐり合つたり、どなりあわねばならないのか。

戦争の恐しさは、何よりも個人が全体の中に埋没してしまうのである。そこでは、個の尊嚴ということはもはや問題にならない。人間ではなく、ものが存在するだけである。私達は今や、戦争でない戦争が私達を非人間化して行こうとしている現実をしつかりと見つめねばならないと思う。ものがどれだけ集まり、規格化されたところで民主主義が育ち得ないことは言うまでもない。私達はもう一度、自分をとり返す必要がある。というより徹底的に自分自身というものを、知らねばならぬ。何故、全体の中に人間を失つて行くのか。戦争をはじめとして、私たちを非人間化せずにおれない社会のしくみだけを告発し、責任をそこに負わせてすむことではあるまい。

名まえは忘れたが、広島に原爆を投下した米軍の士官が戦後しばらく、精神病院に入っていた。というこ

とを聞いたことがある。ひとりの人間として、あの惨状の前に立つた時、いかに命令されたとはいえ、自分が、むしろ当然であろう。彼の不幸を是認するわけではないが、私は彼に対し、むしろ人間性の回復がはかられようとしたのだと言いたい。しかし私達は、ここで人間性回復の挫折ということを考えねばならないと思う。人間の精神力とか、いわゆるヒューマニズムの立場からすれば解決し得ない問題がここにある。罪とそれからの救いということである。イザヤは神の前で徹底的にうちのめされた『わざわい的なかな、われ滅びなん』彼の貴族としての誇りも生活の正しさも問題ではなかつた。神の前に文字通り滅びるばかりの、罪と汚れに満ちた自分を、知らされずにはおれなかつた。しかし、その彼が神によつてなお許され、生かされていふことを自覚した時、「私はだれをつかわそらか」という神の声に対しても「ここに私がいます。私をおつかわし下さい」と答えたのである。

人間が本当の意味で人間になることが、私達の信仰の課題なのであり、それこそが民主主義を生かす唯一の道すじであることを、わきまえたいのだ。そして人間らしいと言うことは、パウル・ティリツヒが言うように「自分自身である勇氣」「共同体に參與する勇

氣」を持ち合はせているということなのだ。

「人間が人間となる、ということは人間が自己の修養や努力によつてある特定の境地にはいつたり、自己の限界性を超克するということではない。むしろ逆に、人間としての限界を生き抜いた時、人間にある望みが眞の望みでないことを知りつくしたとき、なおそこに人間の中に永遠の側から「汝」と呼んでこわれつつある人間性を与える神の愛によつて、人間として生きる態度である。それは、人間による人間性の回復ではなく、キリストによる、新しい人間の誕生である。」

竹中正夫「真人の共同体」より

昭40年「かんらんの新葉」(7号)

その一人は福永先生である。先生は私にとつて「出会い」の意味を体験的に教えて下さつた師であつた。先生によつて私に人生における出会いの素晴らしさに目をひかれたといえる。

はじめてお目にかかつたのは神学校に入る前の年だつたから、もう十六年前になる。当時、西南の児童教育科の科長であり、一麦寮という児教科生の宿舎の一隅に住んでおられた。そして今の鳥飼バプテスト教会の母胎となつたさみどり教会学校が先生の指導のもとに福岡教会の分校としてそこで行なわれていた。何か奉仕をしたいと考えていた頃でもあつたし、友人に誘われて出席したさみどり教会学校の雰囲気は私を夢中にさせずにはおれなかつた。神学生や児教科生が多く、はつらつとしていたし、研究熱心であつた。田舎出の私がただもうびくりする外はないほど皆、話しも歌も議論もうまかつた。だから私を夢中にさせたのは、一つにはむしろ、彼らの舟に乗りおくれてはなるものかという自尊心やあせりからくるものであつたかも知れない。けれども勿論それだけではなかつた。自分が他の人に対してコンプレックスを感じ、何か人々が自分のことをさげすんでいるのではないかといふような気持ちになつたときも、福永先生だけは、他の人にないものがあなたにはあるのだからといふも私はげまして下さつたし、どんなにつまらない意

謙遜 傲慢

ーなき師と友をしのんでー

見も受けとめて真剣に答えて下さつた。先生の慈愛にみちたまなざしにみつめられるうちに「私でもやればできる」というような自信が次第に生まれてくるようだつた。先生は若者のように私たちの議論に加わり、神学生と意見が衝突することがあつても、決して軽くいなしたり、無理やりに自分の主張を押しつけようとはされなかつた。だから私達は安心して勝手なことを喋つた。それでいてふり返つてみると、先生の意見が私達の結論になつていた。

私たちよく遊んだ。時間の経つのを忘れて投球盤やトランプに興ずる時、私たちは先生に肉親の祖母を感じた。先生が病気だつたり旅行で留守をしておられるときは、まるで子供が遊び相手を失つたようにつまらなかつた。仲間は他においても、先生が一緒にないゲームにあまり興味は感じなかつた。

2

母は学校を出て神戸の須磨にあつた福永先生の幼稚園で働いたことがあつたそうである。祖父がメソジストの信者たつた関係で、同じようにメソジストの出身である先生とはかなり古くからの交渉があつたらしい。しかしその様なことは私のあずから知らぬことであり、神学校に進むべきか否か決めかねていた当時の私にとって、三代目のクリスチヤンであり、父が牧師だつたということは一つの重圧となつてゐた。神の存在も、キリストの愛も疑いようはなかつた。しかし人生の辛酸を味わい、罪

の意識にさいなまされてはじめて神の恵みに目覚め、劇的な回心を経験して、パウロのように伝道者として召命を感じ、勇躍神学校に入つてくるような人たちを知るにつけ、私は自分自身が本当のクリスチヤンであろうかといぶかつた。「悩みがないことが悩みだ」とその頃、ある集会で大まじめにはなしたことがある。みじめだつた。

しかし、ある時、祈りの問題で「祈れない」という友人と議論して「その時の気分で祈らないことはあるが、それは我ままであつて祈れないなんておかしい」といつた私に先生は「そうですよ」と私がびっくりするほど強調された。「あなたがクリスチヤンホームに育つたのはそれだけのことがあるのであります。」とことばをつぶれた。その時、私は余り深く考えて発言したのではなく、むしろ友人への反撥心からそういうつたのだが、私はそのことを恥じるとともに、もつと素直に神の恵みを受けなければならぬことを強く教えられた。

幼な子の母としてすこしてこられた長年の生活の中で、先生は「神の国は幼な子のようなものの國である。」といわれたイエスのみことばを誰よりも深く味わつておられた。先生の生涯は、幼な子のように神の国を受け入れることの幸福を実証し、訴え続けることに貫かれていたといつて過言ではない。幼な子の信頼をもつて神の愛を受け入れることができる人はさいわいである。先生はその意味で本当に幸福な人だつた。幼児教育者としての先生にとつて幼な子は、その素直さにおいてむしろ教師で

あつた。幼児教育の真髓は幼な子になりきることではなかつただろうか。

3

先生が語られたことばの中で、「謙遜傲慢」ということを私は忘れることができない。先生自身、若い頃お母さんから教えられたのだといふことがあつたが、折にふれて先生みずからかみしめるようにして語られたことはあつた。

それは教会学校の教師になつて半年あまりたつた頃のことであつた。礼拝で話をするよう命じられた。とたんに私の心臓は早鐘のようにはげしく打ち出した。人のことについては生意氣に批評し、あれくらいいなら自分でできるとひそかに思つても、いざといふことになると、身のすくむような気持ちであつた。いささか自尊心の抵抗を感じながらも「自分にはとても出来ない」と勇気をふるい起して正直に申し出た。そのとき「それは謙遜傲慢といふものですよ」という先生のことばが返ってきた。私は、できない自分を正直にさらけだしたといふことについてむしろほめられることを期待する心があつたかも知れない。先生のことばはショックであり、理解に苦しんだ。しかしあとで、謙遜とは人とくらべてどうだということではなく、神の前にあける態度なのであり、本当に素直になることが眞の謙遜だといふことがわかるようになつてきた。自分にできないときめてしまふことは私たちにそれぞれ賜物を与えて下さつた神に対

する傲慢といわねばならない。「おことばですか、網をおろしてみましょ」（ルカ5・5）と言つたベテロの態度に学ぶべきことを、その頃、私は先生を通して教えられたのであつた。一晩、寝もやらずに礼拝の原稿を作成し、翌日子供たちの前に立つて、がたがたふるえながら勁角の原稿も目にうつらず、ひや汗をかいて話をしたことを思い出す。しかし、それは、私のうちにある強い自意識が神の前で克服されはじめたことを意味した。

そのようなことがあつてから、私は知識や能力が人よりもすぐれているとか劣るとか余り気にならないようになつた。自分よりもすぐれていると思える人の前でも、自分でよければと割合平気に名乗り出ることが出来るようになつた。でしゃばりと人からいわれることや失敗することをおそれていては何もできない。人の前にではなく、常に神の前に謙遜であり、従順であることをさらに学んでいこうと思う。それが福永先生に対する恩返しだと考えている。

4

福永先生を失つて二週間後に神学校の小林助教授の計算を聞いた。神学校では同級だつたが信仰的にも学力の点でも、年令からも私にとっては兄のような存在であつた。学生時代には一緒に春日原教会に奉仕したこともあるが、私は彼の暗い沈んだ表情に接したことがなかつた。ところは私たちにそれぞれ賜物を与えて下さつた神に対し締切日が迫らないと、レポートの書けない私は彼もまだ

書いていないところでよく安心をした。しかし彼は決してなまけていたわけではなく、広く文献を集め、頭の中でまとめていたのだ。だから机にむかうと書きあげるのに雑作はなかつた。しかし外観だけをみていい気になつて、いた私はそういうわけにはいかず、結局レポートの提出がビリになつたようなこともあつた。彼と肩を並べてなどと考えることが土台間違つていたわけだが、彼はいわゆるガリ勉ではなかつた。なまけ者の私にも実によく付合つてくれたし、どんなことにも親身になつて相談にのつてくれて、いつたらいつ勉強しているのだろうと思うくらいだつた。

数年前、スイスに留学するときも、喘息の発作のために出発がのびたのだが、帰国後よくなつたとばかり思つていた。今年の六月に入院したことを見つておどろいた。けれどもそんなに悪化していく彼は特伝の応援や夏に行なわれる全国の牧師ゼミナールの講義のための予定を取り消そうとはせず病床でその準備をしておいたようである。八月の天城での年会にも出席するつもりで上京したといふことであつた。それが彼の最後の旅行になつたわけだが、「わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わつた神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたらこの命は自分にとって少しも惜しいとは思わない」（使徒行伝20・24）といふバウロの気持は、そのまま彼のものではなかつたろうか。

一橋大学で経済史を専攻した彼は、神学校でも教会史

を選び、歴史に対する造詣と洞察が深かつた。明確な歴史観にもとづく彼の発言は全国の牧師会や年会等においてもきわ立つていた。一つのものごとに對して態度を決しなければならないとき、私はどうもなかなか結論を出せないのだが、彼はよく私に對してにこやかにしかし、真剣に「いつまでもハムレットの悩みをかこつてばかりいないように」と忠告してくれた。この彼のことばを私は「あなたは自ら学んで確信していくところにいつもどまつていなさい。」（モテテ3・14）というバウロのことばとともに今、私の心に銘じてゐる。

（昭和43年「かんらんの新葉」20号）

古いものは過ぎ去つた。見よ、すべてが新しくなつたのである

コリント第三、5・17

今年もいろいろなかたから年賀状をいただきました。一部に虚礼だという批判の声もききますが、新しい年をとほぎ、年に一度でも互いの安否を問い合わせる気持をかよわせるならわしを私は大切なものと思います。思いがけない人からのものや工夫をこらした質状に接する楽しみは格別なもので。しかし、それだけではなく、年賀状をうれしく思うのはやはり新年を迎えたのだという共感ではないでしょうか。今年こそは、といった期待や抱負をかわすのも新年なればこそと思ひます。

新しい時の訪れは私たちに希望とよろこびにみちた生活を与えてくれます。しかし私たちは同時に、時の流れが無情なものであること、新しいものをまたく間に古びおとろえさせずにはおれないものだということを忘れてはなりません。新年もやがては色あせてきます。一年の流れだけではなく、人生も同じです。青春は再び帰つてきません。外見だけの新しさにとらわれるならば、希望やよろこびはやがて失望と悲哀にぬりかえられて行くでしよう。聖書はイエス・キリストによる新しい生活を教えています。キリスト教のメッセージは要約すれば「新しい創造」であり、それは「内的な革新」を意味するものといつてよいでしょう。「だれでもキリストに結びついているならば、その人は新しく造られた人、新しいのちに生かされている人である」とパウロは語りました。新しく造られた人は外なる人に対して「内なる人」と呼ばれます。そして、「外なる人は滅びても内なる人は日ごとに新しくされて行く」（コリント第二、4、16）のです。

人生にはさまざまな起状がありましよう。いつも正月の新しさに酔つてはおれないのです。むしろ、「花の生命の短くて、苦しきことのみ多かりき」ということが人生の真実かもしません。しかし、イエス・キリストに結びつくとき、どのような状況であれ「いつもよろこび、たえず祈り、すべてのことについて感謝する」ことのできる生活があるのです。

時の流れにおし流されない真の新しさをまといたいのです。聖書は私たちに次のようにも語っています。
「あなたがたは以前の生活に属する情欲に迷つて滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、眞の義と聖とをそなえた神にかたどつて造られた新しい人を着るべきである」（エベソ4・22—24）

あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。

マタイ 5・16

「ただ今」という子供の声を聞くと、学校でどんなことがあつたか大体わかるような気がします。樂しかったか、それとも面白くないことがあつたか、声の調子が違うからです。どんなことがあつても何もなかつたように平然とかまえたり、うれしいことも、悲しいことも人前にかくすことが美德だというような考えは子供にはあります。それだけに体裁をかまう大人が困ることもよくあります。子供は言動だけでなく、体全体で自分の属しているところを表現しているからです。だからこそ「子供は親の鏡」ともいえましょう。

子供に限らず、人間は結局その属しているものによつて変化します。かつて話題となつた、狼の世界で育てられた子供が発見されて人間社会に連れもどされたけれども遂になじむことができなかつた、という事実は、環境の力のおそろしさを如実に示していますが、單に生活環境というだけでなく、知的に心理的に精神的に、あるいは存在そのものがどこに属しているかということはきわめて大切な問題ではないでしょうか。

「あなたがたは世の光である」とイエスはいわれました。しかし、これは人間の性善説を裏付けるものではあります。わたしは世の光である。わたしに従つてくるものはやみのうちを歩くことがなく命の光をもつであろう」（ヨハネ8・12）といわれます。パウロも「あなたがたは以前はやみであつたが、今は主にあつて光となつている」（エペソ5・8～13）と語っています。つまり、イエスに属しているならば「光の子」なのです。

ところで、「光はやみの中に輝いている」（ヨハネ1・5）のでなければ意味はありません。光は周囲をあかるくてらしてこそ光と呼ぶことができるのです。ですからイエスは「あなたがたの光を人びとの前に輝かしなさい」といわれます。換言すれば「光の子らしく歩け」ということです。親の豊かな愛情につつまれてのびやかに自分を表現できる子供のように生きることといつてよいでしょう。

「光はあるゆる善意と正義と眞実との実を結ばせる」といわれます。まことの光に従つて生きるとき、よい実はおのずから結ばれるものです。ですから「輝かしなさい」とは何よりも、まことの光であるイエスを仰ぎながらひたむきに歩き続けることと言えます。私たちの一歩一歩がイエスのそれに似るまで歩き続けることです。

「子供は親の鏡」といいましたが、鏡は太陽にむかうとき、光をうつし出してキラキラとひかります。その輝きによつて、私たちはたとえ周囲がくらくとも根源的な光を知ることができます。「光の子らしく歩く」ことによつて天の父があがめられるように、といふことがイエスの、そして私たちの願いなのです。

3月の聖句

強く、また雄々しくあれ、あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れではならない、おののいてはならない。

ヨシニア 1・9

勇めやはらから、くらき路にも、しるべの星あり、仰ぎて進め、はるけき行手に、

こころ落さず、み神にたよりて進め、すすめおおしくすすめ
(讀美歌四四七)

これは父が生前、愛唱していた讃美歌の一つでした。病いのために殆んど床に伏したきりの父の思出しかもたない私は、この力強い讃美歌を父が好んでうたつていたということを知つたとき、弱々しくみじめとばかり思つていい父のかくされた一面——逆境ながらも希望と勇気を持ち続けて生きた本当の強さを見出したように感じ、ひそかに誇らしく思つたことでした。父を失つてからの私たちの生活は、終戦直後の混乱と食糧不足の故に多くの人びとが経験したものだつたとはいえ、それはひどいものでした。たとえ病氣でも生きしていくれたら、相談にものつてくれただろうし、力づけてもらえたであろうと考えると、父をなくしたことが口惜しく、それこそ世界中の不幸を一身に背負つたような絶望的な気持におそわれたこともしばしばでした。しかし、そのたびに私の心を慰め、生きる勇気を与えてくれたのは、この讃美歌だつたのです。というより、この讃美歌を表現している神の実在といふことと、その神が共におられるという確信でした。当時、中学生だつた私にとって、行く手はまるで見当もつかないほど遠く思え、希望のない毎日が続いていました。くらさしか感じられないような状況だつたのです。もし、そのような状況だけがすべてであれば一歩たりともみ出すことはできなかつたでしよう。事実、人生の目的や使命といふことなど考へても仕方のないことだと、自分自身のからの中で小さな幸福に甘んじようとした時もあつたのです。しかし、人生の目標もなくただ毎日毎日を泣いたり笑つたりしてすごすということは何と空虚なことでしようか。そのような人が少くないということは絶望的な今日の状況によつてしか生きることのできない人間

の悲劇を物語つてはいられないでしようか。

標記の聖句は、エジプトの奴れい生活から解放されたイスラエル民族が、旅の途中で彼らの杖とも柱とも頼む偉大な指導者モーセを失つたあと、後継者として選ばれたヨシニアに語られたことばです。目的地に到達するためにはなお幾多の困難が予想されました。しかもモーセの姿はすでにありません。けれども、だからといつて、羊飼のいない羊のむれのように決してうろたえ騒ぐことはありません。「あなたの神、主がおられる故、恐れてはならない」のです。

4月の聖句

神は愛である

ヨハネ第一、4・8

幼稚園がはじまつて半月経ちました。泣きべそをかいたり、運動場せましとかけまわつたり、まつわりついてくる子供たちを見つめながら、しみじみとしあわせな姿を思います。何のきがねも、遠慮もなく、のびのびと自分を表現できる世界はなんとよいものでしようか。遊びつかれて、こはんを口にしながら、ことんと寝入つてしまふような子供の生活にこそ明日への成長が約束されているのでしよう。そこには両親や周囲の人びとの豊かな愛情にゆだねきつた平安と充実感がみられます。愛を失い信頼に生きることを忘れた世界に欠けるものはこの平安と充実感ではないでしようか。

物質の豊かさが平安を約束するものではありません。むしろ、多くの場合、それは「虫が食い、さびがつき、盗人らが押し入つて盗み出す」(マタイ6・19)かもしれないという不安や憂慮の原因ともなり、争いを拡大する材料にもなりかねないのです。また、合理的にととのえられた文化生活が、必ずしも人生を充実させるものではないでしよう。流行を追い、S.O.とかT.P.O.などがさかんに宣伝されている現代の奥底に一つの空虚感がただよつていることを否定できるでしようか。

かつて神戸のスラム街で無頼漢や浮浪人の間にまじつてキリスト教の伝道をしている青年がありました。結核に犯され、医者から死の宣告を受け、その日の食物のあてもないというような状態の中で彼は人びとに訴え続けたの

でした。

「何度もぼくは言う。神は愛だ、倒れるまでぼくは言う。神は愛だ……二十世紀の文明には愛がない。愛の飢饉だ。愛は真実の世界を創造し、愛が世界を保持する。愛は神の本質だ。ぼくは愛の奴れいだ。愛あるところに神がある。いのちがある。愛はぼくのすべてだ」

これは日本が誇る社会事業家、賀川豊彦の若き日の姿です。伝道者であり同時に小説家、詩人でもあつた彼は、「神は愛だ。深い愛だ。こじきの子を抱きしめて、わたしは言う。神は愛だ」とうたいました。いかなる貧の中にあっても、こじきの子を抱きしめながらも「神は愛だ」とうたわずにおれない生の感動を私たちは学びたいと思います。彼のことばのように、その様な愛こそが世界を創造し、保持し動かして行くのです。そのような愛が賀川豊彦をスマム街におもむかせたのでした。パウロがコリント人への第一の手紙で語つてゐるようになれば「愛がなければ」一切は無益であり、無に等しいのです。そして、その愛は「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さつて、わたしたちの罪のためにあがなないの供え物としてみ子をおつかわしになつた。ここに愛がある」（ヨハネ第一、4・10）とあかしされているのです。

5月の聖句

おののおの、自分のことばかりでなく
他人のことも考えなさい

ピリピ 2・4

子供は人形が大好きです。きせかえたり、髪をくしけずりながらの子供と人形との会話は、ききなれた耳にも、いつもほゝ笑ましく思います。だから教わつたといふわけでもないのに役柄をちゃんと心得て、適当にお喋りをしてゐる姿を見ながら、人間は生れながらに社会的存在であることを痛感します。ひとりではあり得ないです。「人の間」と書くことば 자체、そのことをあらわしていると言う人もいますが、それは単に共存しているということではなく、もつと積極的に助け支えあう関係を意味するものでなければなりません。大衆の中の孤独ということばがあります。どれだけ多くの人ひとと一緒に生活をしていても、他との一切のかか

わりをたつて生きようとするとき、人間はもはや本来的な意味での人間であることを放棄したといわねばならないでしよう。意識的に他とのかかわりをたつというより、今日の世界がおしなべて私たちに非人間化への道をたどらせようとしていることを警戒しなければならないと思います。生きることへの連帯性がはばまれ、共感がとぼくなつてはいないでしようか。孤独感や空虚感がしのび込んではいないでしようか。孤独感は不安を生み、不安は絶望を呼び起し、絶望は狂躁をかりたてます。それ故に、狂気じみた人間の行動のうらには他と連帯し得ない深い孤独があることを指摘しなければなりません。その孤独は「自分しかないとかたくなに思いこむことです。神と人を信じることができず、愛し愛される世界を知らないからです。」

聖書は五月の聖句が示すように「自分でなく」他の人のことも考え、すんで手をさしのべて共に生きることを教えます。ですから、それは決して目新しいことではなく、いわば人間らしい生活を呼びかけ、すすめているのです。けれども、それはいわゆる一つの道徳訓ではありません。「『わたしが（キリスト）あなたがたを愛した』ように』互いに愛しあいなさい』（ヨハネ15・12）」「『神に愛されている子供として』神になりう者になりなさい」（エベソ5・1）というように、愛されているという自覚に訴えているのです。いわば、豊かな両親の愛のもとに

ある子供が自然に愛を学び、愛を生きるよう、ということなのです。

母の日を五月にむかえ、「あなたの父と母を敬いなさい」ということばも学びますが、眞実の愛に子を目覚ましめ、愛がかもし出す豊かな世界に子供を導く親こそ、尊敬にあたいすべきものでしよう。さらに、そのような親の愛がゆびきるもの、眞実な愛の神にこそ、心からの讃美歌がささげられねばなりません。

「あさやかに とこよの愛をあらわせる

母ごころにぞ 神のさちあれ (讃美歌 四三七)

神さまのなされることはみなその時にかなつて美しい

伝道書 3・11

いちごがりの季節です。……といながら実感があまりわからないのは、もう一月以上も前からいちごをみなれているからでしようか。最近は季節感というものがとみにとぼしくなつたように思われます。農業技術や交通機関の発達は時間的にも空間的にも、あらゆるもの距離をせばめて、冬に夏のものを、小倉にいながら北海道でとれたものをその日に貰味するということがいかにも当然なこととしてできるようになりました。便利になりました。しかし、その反面何か一抹の淋しさを感じずにはおれないのは私だけでしょうか。淋しさだけではありません。私たちは便利だということの故に、折々のものに対する素朴な感動をいつしか忘れてはいないでしようか。

梅雨の季節が訪れようとしています。大人にとつてうつとうしい時期です。しかし、たとえばレクレー・ションセントーやその他の文化的な施設は戸外に出なくて、けつこう雨の日の憂うつを忘れさせてくれるようになります。便利になつたものです。けれども、子供の頃、雨に濡れた木かけに雨蛙をみつけて、あかずにその動きをみつめていたような恩出から遠くへだつてしまつたことを悲しまないでよいのでしょうか。子供には梅雨の憂うつはありません。雨の中をとび出したりわざと水たまりに足をふみ入れたり、親をやきもきさせながら、たわむれる子供の姿に私は、オーバーな表現かも知れませんが、人生を感動的に生きるもの姿を見出すことができるよう思います。そして私はその子供のようすんだひとみをいつも持ちたいと思わずにはおれません。すんだひとみを持つて人生をみつめるとき、私たちは「神のなされることはみなその時にかなつて美しい」と新鮮なおどろきをもつて告白せずにはおれないでしよう。神は天と地と海とその中のすべてのものをお造りになりました。創世記には神は万物をつくり「これをよしとされた」と記されています。神がよしとされ、恵みをもつて支配されているものが、みにくいはずはありません。しかし、そのことは知恵あるものや賢いものにはかられています。「幼な子にあらわしてくださいました」（ルカ10・21）幼な子のような素直な心、信頼すべきものにひたむきによりすがつて生きようとするものにとつて、人生はその時その時に美しくうつらうにはおられないのです。過去の思い出にひたつて生きるのでなく、将来にかけて現在の苦境に歯をくいしばるのでもなく、今の時もまた神のよしとされた時であり、恵みのとき、かえりみの時であることを知つて、せい一杯に生きることを学びたいものです。

成長させて下さるのは神である

コリント第一の手紙3・6

父の日のプレゼントに、幼稚園で描いたお父さんの似顔絵を苦笑してうけとりながら一つのことにつきました。画面一杯に描かれた似顔の左右に真赤な太陽がぎらぎらと輝いていました。考えてみると子供の絵には、多くお母さんを描いても汽車や船を描いてもちゃんとおひさまがのぞいているようです。雨の景色にも太陽が描かれている子供の絵をみかけることもあります。絵の構成と発達段階についてのせんさんは専門家にまかせるとして、私は子供におしえられるような気がするのです。

ひとりの人が成長して行く過程にはどれだけの愛と苦労が注がれていくことでしょう。ことに両親のそれは筆舌にはつくされません。運動場狭しとかけまわる子供をみつめながら、それこそはそれにさわる思いで手のひらにのせて湯をつかわせた頃をふと思い出します。あれほど無力な存在はなかつたでしよう。もし両親をはじめ周囲の人々のあたたかい配慮を欠ぐならば無力なものが地上に生きることは不可能に違いありません。けれども聖書は周囲の愛と苦労の必要を説きながら、なお究極的な意味においてまことの育て主は神であるということを教えます。「わたしは植え、アーロンは水を注いだ。しかし成長させて下さるのは神である」とパウロは語ります。秋のみのりを期待しながらお百姓さんが泥にまみれて田植えをし、ひでりが統けば川からおけに水を入れては何回も何回も田んぼを往復するそのような姿をみかけることも珍らしくはありません。稻を育てるためのその労苦は何と尊いものでしょうか。しかし、その労苦があれば万事がなるといふものではないのです。神の恵みと力なしにはいかなる労苦も実を結ぶことはできません。イエス様は、「あなたがたのうち、だれが思いわずらつたからとて、自分のいのちをわざかでも延ばすことができようか：：野の花がどうして育つているか、考えて見るが良い。働きもせず、枯れもしない：：」（マタイ6・25-34）と教えられました。神さまがまことの養い主であり、成長させさせて下さる方であることを知るものにとつて思いわずらいは不要なことです。

私たちがもし私たち自身の労苦にのみしがみつこうとするならば、思いわずらいから、のがれることはできません。私たちは子供に対しても私たちの労苦を語るのではなく、成長させて下さるいのちの主をさし示すものであり

たいと思います。神に本当に信頼をよせ、雨の中でも太陽を仰ぐことのできるような子供にすることが親としてのつとめではないでしょうか。

8月の聖句

わたしを強くして下さるかたによつて何事でもすることができる（ピリピ4、13）

身体障害芸術家協会から今年も「手のない人の芸術絵葉書」のサンプルが送つてきました。実に見事な絵葉書ですが、紹介のために同封してあつた製作中の写真を見て、私は深い感動を受けました。絵筆を口にくわえたり、足の指にはさんで製作している姿に、本当の人生を知らされたように思うのです。それと対照的に、先日阿蘇に登ったとき、白衣を着た傷い軍人がアコーデオンをひきながら、人びとの施しを乞うていた姿を思い出します。戦後二十年、いまだにそのような姿を白日のもとにさらさなければならぬであります。戦争で受けた傷以上に深く病むものを感じます。

両手を失つたり、失明したという人生の不幸に対し、ある人々は人並以下といふようなひけ目や、失意、傷心を抱いて、かすかに命脈を保つというような生き方しか見出しえません。しかし、逆境をたくましく、それこそ不可能を可能として自分の力で生きてゆく人もいるのです。私はここで世間には二通りの人がいるということを述べようとしているではありません。自分の力で、といつても人間には限界があることを忘れてはならないのです。

「余の辞書には不可能といふことははない」と豪語したナボレオンもセントヘレンに流されて、失意の最後をとげました。しかし、もし彼をどこまでも激励し支持する力ある人がいたならば事態はかわつたかも知れません。前途の身障芸術家の写真でもう一つ感動したことは、同じように両手のない先生が傍で、それこそ手をとるように教え、はげましている姿でした。同じ境遇の中で血みどろの苦斗を続けながら立派に生きている先輩のはげましは百の同情に勝るものに違ひありません。

神さまを信じるということは、神さまに同情していただいて何とか生きることができるというような安易なそして消極的な生き方を教えるものではありません。信仰は逃避のためにあるものではないのです。

「私を離くして下さるかた」とパウロが語るとき、苦しむことも恵みとして賜わつた神（ピリピ1、29）しかもどんな患難の中でも決して見くて見守りはげまして下さる眞実な愛の神（コリント第一、10・13）を示しているの

です。だからこそ彼は患難をよろこび、患難によつて忍耐を、忍耐によつて練達を、練達によつて希望を知る。」
（ローマ5・2-8参照）と語ります。このような神を知るとき、私たちも、どのような境遇の中でも、それに支配されないで耐えて行くことができる、いわゆる人生の勝利者となることができるとき聖書は教えてくれます。神に信頼して生きるとき神は決してみすこしたり、安価な同情でこまかさず、父がその子に対するように扱つて下さるのです。

9月の聖句

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である

（ヨハネ15・5）

秋の楽しみの一つは、いちじくや柿などの果物が食卓を賑わしてくれることです。中学生時代を田舎で過ごした私にとって、その味覚はそのまま郷里の思い出につながります。牛小屋の裏の大きないちじくや、本家の庭にそびえる柿の木が今にも目の前に現われてくるような何ともいえないなつかしさを感じます。まだよくうれていないいちじくの実をもいでしまったとき、伯父はひどく私たちを叱りました。お腹をこわすからというより、伯父にとって成熟しない実をもぐことは、大きめの方かもしれませんのが、一つの冒瀆と考えられたのでしょうか。ですから若し遊びがすぎて枝を折つたりしたら大変でした。枝を木につけよ、といわんばかりに叱られたものでした。伯父は根からの百姓でした。稻刈りにしても、落穂拾いを私たちに命じ、自分でもまたそのあとをたん念に拾つて歩いていた姿を思い出します。

お百姓にとって、収穫——実を得るということは大問題です。収穫のためにあらゆる労苦を惜しまず、犠牲をかえりみないお百姓さんにとって、一つの果実、一粒の米はまさにかけがえのないものだ、といわねばなりません。

実を結ばないいちじくの木や柿の木はお百姓さんにとつては観賞用にもなりません。ところで、あまりにもわかりきったことですが、もし枝が幹についていなければ、いくらお百姓の労苦があつても実を得ることはできません。実をつけるのは枝であり、その枝は幹につながることによつて幹から必要な養分を供給してもらひ、はじめて実を結びます。枝を折つたりすれば、せつから実を結びかけていても、その実は枝とともに枯れ朽ちてしまつて、たき木にされる外はないのです。

イエスはユダヤの人びとの生活になじみ深い、ぶどうの樹を例に、人生の目的がよい実を結ぶことにあると教え

られました。お百姓が秋のみのりを喜ぶように、人生に結ぶよい実は神をよろこばせ、神の栄光をあらわすのです。「わたしは（イエス）はまことのぶどうの木、わたしの父（神）は農夫である」（ヨハネ15・1）そして「あなたがたはその枝である」といわれます。枝によい実を結ばせるために、聖書は、神がいかに心をくだき労し続けておられるかということを教えています。聖書の神は働き給う神です。（ヨハネ15・17）しかし、大切なことは枝が幹にしつかりと結びついていることです。イエスと結びつき、イエスのいのちにふれるとき、はじめて私はよい実を結ぶことを約束されます。その実とはパウロが「みたまの実」（ガラテヤ5・22）と呼ぶもの、即ち、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」に外ならないのです。このような実が今日の世界にいかに欠けているかということを考えるにつけ、先ず、私達がよい豊かな実を結ぶものでありたいと思ひます。イエスとの深い結合に生きることです。

10月の聖句

目標を図さして走りなさい

（ペリピ3・14より）

秋空に号砲一発。いつせいにかけ出す子供たちの姿をみつめていると、一緒にかけ出したいような衝動にかられます。私は速いほうではありませんでした。それでもせいいつぱいにゴールにむかつてかけぬくときの充実感は忘ることはできません。体操の先生はきびしい人で、スタートのときの目のおきどころをすいぶんやかましくいわれたことを記憶しています。走るとき、後を振りむいたりするとひどく叱られたものでした。いうまでもないことでしょう。

ところで、このことは人生という大きな競争についてもいえます。目標が正しくみつめられているか。わき目をふらずに走りぬこうとしているか。こうしたことときびしくたずねる必要があると思います。受験期をひかえた高校生などのノイローゼは依然としてあとをたません。昨年、知り合いの高校生が大学入試に失敗しました。あとできっと一点の差だったそうです。さいわい、彼は信仰にもとづく一つの使命感をもつて進学しようとしていたので、そのことによつて気落ちすることもなく、今春無事に同じ大学に進むことができましたが、一点の差が、人間の運命を右と左にわけてしまうかもしれないような時代です。よほどしつかりと人生の目標

お見定めでない限り、生存競争ののきびしさにいためつけられて落伍せざるを得ないのは当然のことでしょう。

先日も高校でのテストの様子を聞いて驚きました。高校だけではありません。小学校、中には幼稚園に至るまで世はまさにテスト時代です。テストを否定するつもりはありませんが、その都度はり出される成績順位が、いたずらな競争心と焦燥感をかりたてている現状は憂うべきです。そのうえ、テスト、テストであげくれて、人生の意味や正しい目標がどれだけ教えられまた学ばれているか寒心にたえません。実力をつけるより相手を負かすことにエネルギーが用いられる。そのくせ人生の意味などたずねもしない生活というのは、ちょうど走る目標も知らずに相手をおしのけつきとばして一番になろうとしているようなおろかさといつてよいでしょう。

子供たちは今、人生のスタートラインに並んでいます。目標のはつきりしない競争はさせたくありません。走りきったときに「よくやつた」と神様からほめていただけのような人生をはじめさせたいのです。そのためにも、まず目標をはつきりとさし示さねばなりません。

聖書は、「信仰の導き手に またその完成者であるイエスを仰ぎみつつ走ろうではないか」（ヘブル 12・2）と語りかけているのです。

11月の聖句

すべてのことについて感謝しなさい

（テサロニケ第一・5・18）

未曾有の干害におびやかされながら、今年も全国的には豊作が伝えられています。収穫を祝う秋まつりも問もなく各地で賑やかに催されることでしよう。五穀豊饒を祝い、土地の神に感謝をささげる習慣は世界のどこでもみられるようです。

教会や幼稚園でも十一月は収穫感謝の行事が行われます。私たちの教会では、毎年、果物や野菜を持ち寄つて礼拝を守つたあと、それを施設に贈り、ともどもに収穫の恵みを感謝することにしていますが、このような収穫感謝の催しは遠く旧約聖書の歴史に起源をもつといわれます。旧約聖書のネヘミヤ記の記事によれば、人びとはオリブやなつめやなどの枝で仮庵を作り、七日間その中に住んで祭りを行いました。（8・15—18）それはレビ記23・39—43の規定にもとづくもので、単に収穫のよろこびにとどまらず、あらゆる苦しみの中から導き出して下さった真実な支配者、まことの神に対する感謝と讃美を意味するものでした。

このことを一層明確に伝えるものは、米国の建国につながるピューリタンたちの物語でしょう。一六二〇年九月信仰の自由を求めてメイ・フラワー号に乘込みオランダのライデンを出発した一〇一名のビリグリム・ファーザーズはアメリカ大陸にたどりついて一冬の間に約半数を失います。きびしい自然の条件に彼らはいくたび挫折感におそれ、絶望的な思いにかられたことでしようか。しかし彼らが開拓した畠は、翌年の秋、見事な実を結びました。彼らは茹入れを終えると心から神に感謝をささげるのでした。それは必ずしも農作だったからということではありますでした。苦渋にみちた生活の中にも、神のみえざる愛の手がさしのべられていたことを彼らは知りました。聖書に「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試験に会わせることはないばかりか、試験と同時にそれを耐えられるようにのがれる道も備えて下さるのである」（コリント第1・10・13）とあります。が、信頼するものを決して恥かしめず、よきものをもつて養つて下さる神の真実に対し彼らは感謝したのです。

この神の真実に気付かされるととき、人はどのような境遇であつても、その生を肯定し、日常のささやかな出来事にも新鮮なおどろきを感じ、感謝をささげにはおれないでしょう。

「あの日はすばらしい日でした。沢山の人声と楽器の奏でる朝と夕の讃美歌が私のところまでも響いてきました。へちらの主をほめまつれ。恵みの神は悩みいかに深くとも、み實をのべ給わざることなれば：：：：：＼と。そうです。私たちはこのことに信頼して、もつと明るくなりたいものです。さあ、春が力強くやつてきました。家庭の仕事もふえたことと思います。この収容所の庭は、朝に、今この夕にも、つぐみの声が全くすばらしうございます。ちょっとしたことですが、これにも感謝がなされていいと存じます。これもまた、たしかに天の賜物なのですから。」

これは三十九才の若さでヒトラーによつて処刑されたドイツの牧師ボンヘッファーが獄中から両親に書き送つた手紙の一節ですが、このような生の感動がいつたいどこから生れるのか、今日の社会が、物質的には豊かになりながら見失つているものといえましょう。

「感謝する」心、また感謝のことばは美しいものです。実際、「ありがとうございます」ということばがどんなにお互いの気持をなごませ明るくさせるか、いうまでもありません。自分の要求を相手に押しつけようとするところでは反対に、はげしい敵意と不満しか見出すことができないでしょう。自分が期待する結果に対しただけではなく、むしろ、いつも相手の善意に対し感謝する心を学びたいと思います。それは彼自身を受け入れることに外ならないのです。

「神われらと共にいます」

マタイ2・23

クリスマスの月になりました。年ごとに装いをこらす師走の街角眺めながら私は数年前のクリスマスの一つの光景を思い出します。

クリスマスセールで賑わうダラスの街の見事な飾りつけをあとに、テキサスの平原を東にルイジアナの近くまでドライブしたときのことでした。とある道ばたに、たそがれの光をあびて静かに立たずむ人の姿をみかけました。しかし、人とみたのは誤りで、それはペツレヘムの馬小屋を模してしつらえられたキリスト降誕のセットだったのです。ダラスの街のはなやかな光景だつたことでしょう。ショーウィンドウの飾りつけも、ネオンの輝やきもそこにはみられず、訪れる人とてない静寂があたりを包んでいました。旅行者でなければ見落していたかも知れません。誰がしらえたのか知るよしもありませんが、私はクリスマスの本当の姿にふれた思いで、胸にあくこみあげてくるものをおさえることができませんでした。

二千年の昔、人びとは救主の姿を首都エルサレムの豪莊な王宮や邸宅の中に、あるいは学者の家に見出そうとしました。立派な軍隊、豊かな経済力、すぐれた能力に救いを見出そうとする人びとは今の時代にも少くありません。しかし、それらのものが一体どのような救いを与えてくれるのでしょうか。権力を握れば或いはお金持になれば、賢くなれば、問題が解決すると考えるのはおろかなことです。権力欲や富のあくなき追及と執着がいかにみにくく争いの渦中に人を追いやり、人と人の間をひき裂いているか、地獄相ともいうべき人間の現実を私たちは知らなければならないと思います。

やがて夜が訪れて来ます。それは不気味な死の沈黙をあらわすものといつてよいでしょう。はげしい生存の争いのはてに待ちうけているものをみきわめねばなりません。たとえ栄光をかち得たとしても、それはつかの間の夢にすぎないのでです。

救主がお生れになつたのは真夜中のことでした。しかもエルサレムの王宮ではなく、訪れる人もない片田舎の家

畜小屋で、銅葉おけを寝床にお生れになつたのでした。何とひめやかな貧しい出来事だつたことでしょう。しかし、人びとが深い眠りにおち入つていたとき、なお目覚めていたごくわずかな人たちがこのことを「大いなるよろこび」のしるしとして受けることができたのです。野宿しながら、羊の群の番をしていた羊飼たちは夜のくらさを身にしみて感じていたに違ありません。夜が明けそめるのをただ待つ外はない彼らに救主の降誕が告げしらされたのでした。救いは人間の努力や工夫によつて生れるものではありません。自分ではどうしようもない現実を卒直に認め、ひたすら光を待ち望むものに神はこたえて下さるのです。マリヤの場合を考えてみましょう。うら若いマリヤにとって初産の場所が旅の途中、しかも家畜小屋だということは、ずいぶんみじめなことではなかつたでしようか。生れてくる子供のためにもやわらかな寝床をと思わない母親はないでしよう。でも、それを用意する力は彼女にはありません。疲れきつたからだをわらの中に横たえながら、マリヤはもう何も考えまいとするのです。しかし、産れ出たみどり子の泣き声を聞き、そつとひき寄せてほほずりをしたときのマリヤのみち足りたよろこびは何にたとえることができるでしようか。彼女は黄金を山のように積んでもなお手に入れることができないものをしつかりと抱きしめているのです。やがて、しらせを聞いた羊飼たちがかけつけて来てマリヤに祝福を送り、みどり子にさんびをささげます。みどり子を中心して敬虔な祈りをささげるヨセフとマリヤ、そして羊飼たちの姿は貧しいながら何という平安に包まれていることでしょうか。

クリスマスに私たちはこのよろこびと平安を学ばなければなりません。「神はそのひとり子を賜わつたほどにこの世を愛して下さつた」とヨハネは語っています。人間が自力で幸福をかちとるために何ごとかを神にお願いしてかなえてもらうというではありません。クリスマスは「神われらと共にいます」というしるしなのです。

私たちはこの時代が「共に生きる」ということを忘れていたために深い孤独と絶望の淵におち入ろうとしていること、さらに絶望が人びとをむなしい狂騒にかりたてていることをもう一度しつかりとみきわめながら、「神われらと共にいます」というクリスマスのメッセージに対し、心を開き、神のひとり子イエス・キリストのご降誕をよろこび迎えたいと思います。

(聖書ルカによる福音書二章参照)

あとがき

○ 主の深いあわれみはいうまでもないことですが、十余年の間、未熟なものを牧師として立て、支えて下さった小倉教会の皆様のご厚意を心からありがたく思っています。口にいいあらわせない感謝の気持で、このささやかなもの贈らせさせていただきます。

○ 在倉中、私の願いの一つは、教会に出席することが困難な方のためにも、何とかして聖日のメッセージを取り次ぎたいということでした。それで何回となく説教の原稿をまとめて印刷をと思つたのですが、生来の不精のために、週報に時折り梗概を記す程度で、遂に実現できませんでした。怠慢を恥じています。

○ ゼーメて最後にと、原稿を整理しながら語つたことはを文字にすることの気ははずかしさからめらう気持がありました。伝道者のわざは「パンを水に投げる」ことだと考えておりましたし、一度語つた原稿をひろげることは私にはどうも勇氣のいることでした。それを書き残すというのですから汗顔の至りです。

○ しかし、これは私が小倉教会の講壇からあるいはまた「かんらんの新葉」や「あゆみ」等を通して語らせていたいのですから、小倉教会の皆様にはもうおなじみのものです。そして私にとって、みことばを取次ぐということは、ただ一つのこと、即ち「イエス

は主なり」ということをさし示す信仰告白のわざにほかなりませんでした。

○ 同時に、この信仰告白のわざが小倉教会の皆様と共に福音にあずからせていただき、その生活の中で与えられたものだということを考えるとき、これは共同のわざだと思わずにはおれないのです。ですから、小誌も私の記念に受けとつていただきなく、むしろ皆様の愛の働きの記念とさせていただきたいと願っています。

○ 話題はルカ19・40に記されている主のおことばからの引用です。小倉教会の牧師として就任したとき与えられたことばでした。私は口の重い、語るべきこともわきまえないようなものにすぎません。しかし、「この人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」といわれるような力にみちたよろこびのおとずれが私たちの手に委ねられているのです。

○ そのことをもう一度はつきりと心にきざみつけて新しく与えられたつとめに赴きたいと願っています。そのような気持で「十字架のことば」というメッセージを最初に加えました。あわたしさの中で推敲するいともまなく書きあげたのですが、どうぞ汲みとつていただきたいと思います。

○ 牧師としての最初の生活を小倉教会でござせていただいたことは本当にさいわいなことでした。多くの

父母亲あるいは兄弟、姉妹を持つことができたよろこびは何ものにもかえられません。ひとりひとりの表情や姿を思ううかべながら福音と共にあずかるこの素晴らしさをかみしめています。これは離れてても消え去るものではありません。願うことは、たとえ離れていても「一つの靈によつて堅く立ち一つ心になつて福音の信仰のために力をあわせて戦い、かつ何事についても敵対する者どもにろうばいさせられないでいる様子を聞かせてほしい」（ピリビー・27・28）ということです。

○ 小倉教会での生活を通して、さらに多くの人々との親しい交わりを与えてくれたことも感謝です。西南女学院、幼稚園の母の会、北九州バプテスト連合、市内の各教派の教会の皆さんのことを考えるとき「この町には私の民が多せいいる」という主のみことばが強くひびいてきます。協力と一致のわざがさらによくすめられていくようとに祈ります。

○ 多くの国外、国内の著名な先生がたのご助力もいたきましたが、ロングビューカー教会とフォード先生のことは、忘れることができません。身内のように迎えていたいた一ヶ月の米国での生活は、国籍が違い、ことばや習慣がことなつても、主につながるもののがお互いにどんなに身近かな存在かということを教えてくれました。昨日、フォード先生から手紙を受取りました。

先生の心にも小倉教会が生き続いているの便りを本当にうれしく思いました。全世界に及ぶ愛のきずなをさらに拡げて行きましょう。そのため労苦することができるようになると祈っています。

○ あとがきがいつの間にか獎勵になつてしましました。習性でしょうか。口をひらけば語らずにはおれないのです。そして、語ることの苦手な内気な私が、いつの間にか、そのことによろこびをすら感じるようになつていてことにふと驚くことがあります。これも小倉教会の生活の中で与えられた恵みといつてよいと思います。感謝はつきません。

○ 最後にこの小説の発刊のためにアドロン社の山下省三氏から並々ならぬご好意をいたいたことを付記して謝意をあらわしたいと思います。熱心にすすめて下さったばかりでなく、献身的なご奉仕をいただきました。貧しいものではあつても、少しでもそれが主の恩みを伝えることになるならばと、山下さんの信仰的な情熱にすつかりかぶとをぬがされた格好ですが、ここにも福音による交わりを知ることができました。感謝です。

昭和四十三年十二月十六日

金子純雄